

尾口のでくまわし 大 職 冠

国指定重要無形民俗文化財 尾口のでくまわし

# 大 職 冠

## 「大職冠」登場人物

万戸將軍

龍王

龍女

大職冠―淡海公

―藤若丸―房前

海女(のち亡霊)如意輪觀音

行基菩薩

### あらすじ

大職冠藤原鎌足の子孫は、美人の誉れ高く、望まれて中国唐王朝第三代皇帝高宗の後になつて来た。鎌足が氏寺興福寺を建立することになつたので、お祝いの品を願ひ出したので、「面向不背の玉」をはじめ数々の宝を送ることになり、万戸將軍に命じ船で届けることになつた。海底に住む龍王はこれを聞き、仏法に結縁するなかだちとするためにこれらを奪ひ取る計画を立て、阿修羅一族の助力を得て、日本と中国の境にあるちくらが沖で船を攻撃したが撃退されてしまった。そこで、美しい姫君に姿を変えて船に乗り込み、万戸將軍を誘惑したところ、みごと「面向不背の玉」を奪うことができた。將軍はやむなく、この宝を欠いた状態のまま他の宝と高宗の書状を鎌足に届け帰国した。

鎌足の子孫は、父が万戸將軍の過失を咎めず、三つの宝すべてが日本に届いたと中国皇帝に報告したことに責任を感じ、「面向不背の玉」を龍王から奪ひ返すことを決意する。氏神の神託に導かれて、讃州天野の里に下り、海女の家で一泊を借り、それが縁で、この海女と夫婦になる。やがて、二人の間に、藤若丸という男の子が生まれる。三才になつたとき、淡海は自らの素性を明かし、なんとか龍宮にまでもぐつていき、龍王から「面向不背の玉」を奪ひ返すことができれば、この藤若丸を都の立派な公卿にする約束する。

淡海の言葉信じて、海女は、房前の浜で大がかりな舞樂の会を催し、海中の魚たちがごとく集つてきたすきを見はからつて、海にもぐり、珠を奪ひ出すが、守護の竜神に襲われて命を失う直前、わが乳を掻き切つて珠をそのなかに押し込んで浮かび上がってくる。人々は失敗したと思つたが、海女は乳の下を開けば珠はあると言ひ、ただ、そこを開くと死んでしまうので、その前に一目藤若丸に逢ふことを願ひ、乳房にとりすぎる藤若丸を掻き抱きながら、自ら傷口を開いて珠を取り出しそのまま息絶える。その後、珠は興福寺に送られ、本尊の眉間にはめ込まれた。

都に出た藤若丸は十四歳の年には右大臣房前となつて来た。自分に母親のない理由を知ると、その墓に詣でることを思い立ち、ひそかに讃州志度に入る。そこで会つた海女(実は母の亡霊)から母の最後の様子を聞き、志度寺の行基菩薩に願つて、母の菩提を弔うために「草木国土悉皆成仏の大法輪」を営むと、虚空に母の姿があらわれ、「自分はまことは如意輪觀世音であり、衆生済度のために海女となつて現われた」といふ言葉を聞きながら母に別れを告げる。以後、志度寺は仏法繁昌の地として栄えたといふ。



東二口



深瀬

# 大職冠 初段

- ①あらゆる願いを叶える不思議な珠。衆生を利益すること限りないことから、仏教では仏や仏説の象徴とされる。
- ②あらゆる宝。
- ③この世に生きていない間。
- ④仏事を行ない、死者の成仏を祈ること。
- ⑤天・色界・無色界などの「辺境・首擧瘡癩」長寿世智弁聡・仏前仏後を加えた八難。仏法を聞くことができず、修行のさまたげになる八種の境界。
- ⑥苦しみ絶えない世界。人間界。
- ⑦謡曲「海人」に「玉中に釈迦の像まします、いつかたより拝み奉れども、同じ面なるによつて、面を向かふに背かずと書いて、面向不背の玉と申し候」とある。中に込められた釈迦の像が、どこから見ても自分の方に向くように生かして生けるものに恩恵があること。
- ⑧唐第三代皇帝（在位六四九〜七八三）。
- ⑨いさおいがあがるようす。
- ⑩儒教で、人の守るべき五つのみち。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信をいう。
- ⑪仏教で、修行の階位としての三つの位。
- ⑫とも中国古伝伝説上の、五人の理想的な聖天子のうち一人。世の中がよく治まっていた時代。
- ⑬仏を尊んだ呼び方。
- ⑭古代中国で、インドシナなど南海の諸国を言った。
- ⑮古代中国で、チベット・トルコなど西方の異民族を言った。
- ⑯中国の王の徳を受けらる。
- ⑰鎌足の娘は氷上娘、五百重娘の二人が知られており、二人とも天武天皇の女御となった。舞の本の「大職冠」では（鎌足の）二女にあたり給ふを、紅白女と名付けて、三國一の美人たり」とし、太宗皇帝（業績徳行が初代皇帝に次ぐ帝に与えられる称号）の后に迎えられており、謡曲「海土（人）」（謡曲大観「所収」の間狂言では「光伯女」とし、「淡海公の御妹は唐土高宗皇帝の后に立たせ給ふ」となっている）。
- ⑱日本神話で、天の岩戸前で祝詞を奏し、天照大神の出現を祈り、天孫降臨の際、五部神（いつとものおのかみ）の一柱として付き従ったとする。中臣・藤原の祖神とする）。
- ⑳「大職冠」は大化三年（六四七）に制定された十三階冠位の最高位。唯一藤原鎌足に授けられたので、藤原鎌足の称ともなっている）。
- ㉑中国。
- ㉒「妹背」は夫婦。夫婦になりたいとの強い思いの常。

さてそののち、それ摩尼珠は、思いのうして万宝を降らすといえども、今生一旦の宝にして未来の回向とならず、かえつて三途八難の種となる、苦界に沈むなかだちなり。

そもそも面向不背の玉と申して、利益衆生の重宝、震旦国よりわが朝にわたらせたもう。由来を詳しくたずぬるに、ここに日本より西北にあたって、支那四百余洲の総王、唐の太宗の御子に、高宗皇帝と申したてまつり、威勢の帝おわします。

もとより君子の道を学び、五倫三賢の序にかなひ、帝堯虞舜の功風を起こし、なおまた如来の遺法を尊び、民を憐れみたまうゆえ、南蛮・西戎もろともに王化によくし申すこと、野なる草葉の春風に吹かれてなびくにことならず。

御后、皞白女と申したてまつるは、日本天津児屋根の御ゆずり、大職冠鎌足公の御娘。美人のきこえ高うして、唐土までもかくれなく、三千万里をへだつれども、妹背わりなきなら

摩尼珠は、あらゆる財宝をもたらすものですが、しかしそれも、生きているときだけのもので、来世に持つて行くことはできません。それだけではなく、逆に仏法から遠ざかり、苦界に沈むきっかけになるものとなったりします。そもそも、この玉は、面向不背の玉と呼ばれるもので、衆生にとっては、大いなる利益を与えてくれる大切な宝であります。この宝は、中国から我が日本に渡ってきたものですが、その由来を詳しく調べてみますと、ここ日本の西北にあたる支那の四百余洲の王である唐の太宗の御子に高宗皇帝という立派な帝がいらつしやいました。君子の道を学び、五倫の道にはずれることなく、仏の道を修め、帝堯・虞舜の古代聖王の道を継ぎ、如来のこした法をたつとび、民を大切にされたため、野の草葉が春風に吹かれてなびくように、南方・北方の異民族も皆従ってました。

その後の紅白女という方は、日本の天津児屋根の末裔にあたる大職冠鎌足公の娘です。美人の評判が高く、中国まで鳴り響いていたので、三千万里も離れた、高宗皇帝がうわさをお聞きになり、日本に勅使をつかわし、鎌足公の許しを受けて后にしたのです。

- ① (高宗が) お聞きになること。  
 ② (高宗の) 意向を伝えるために遣わされる特別の使者。  
 ③ 譲ってほしいとお願ひする。  
 ④ 十六歳。  
 ⑤ きさきの位にふさわしく。  
 ⑥ 花模様をついた美しいたれぎぬ。寝堂などに用い、室内が見通せないようにする。  
 ⑦ 大切に世話をされ、架空のものか。  
 ⑧ 阿房宮。秦の始皇帝が渭水の南に築いたことができたという。  
 ⑨ 阿房宮。秦の始皇帝が渭水の南に築いたことができたという。  
 ⑩ 仏教の世界観で、海中に高さ八万由旬(一由旬＝十二・三キロメートル)の須弥山(しゆみせん)がそびえ立ち、その頂上に帝釈天(ていせつてん)が住む切利天があるという。仏法を守る神が住む切利天があるという。  
 ⑪ 帝釈天の居城で、須弥山の頂上にあり、切利天の中央にある。  
 ⑫ 私の。

- ⑬ 手のうち。  
 ⑭ 藤原姓の一族。「藤原」は、大化の改新で功のあった中臣鎌足がその居地にちなんで賜った姓。  
 ⑮ 奈良市にある法相宗の本山。藤原氏の氏寺。  
 ⑯ 一族の冥福と現世の利益を祈願するために建立した寺。

- ⑰ 日本を代表する鎌足の娘としてきちんと。

- ⑱ (取り立てて数えるに足る) 価値のある宝。

- ⑲ (天子が) お出かけになる。

- ⑳ 朝鮮。

いとて、高宗叡聞(こうそうゑいぶん)ましまして、日本(ひのもと)に勅使(ちやくし)をたて、大職冠(たいしやくかん)に請(こ)いうけたまい、御年(おんとし)すでに二八(ににはち)にして、后妃(こうひ)の位(くらゐ)に備(そな)わり、九華(きゅうか)帳(ちやう)の内(うち)にかしずかれ、もとより高き雲(うゑ)の上(うへ)、月の光(ひかり)も明(あき)らけき雲竜閣(うんりゆうかく)や阿房殿(あほうでん)、げにも妙(たえ)なるありさまは、名(な)にのみ聞(き)きし切利天(せりてん)、喜見城(きけんじやう)の楽(たの)しみも、かくやと思(おも)うばかりなり。

時に御后(おんきさき)帝(みかど)に奏(そう)し申(まう)さるるは、

「さてもみずからが父大職冠(ちちたいしやくかん)は、小国(しょうこく)の臣下(しんか)なれども、日本(ひのもと)の政事(まつりごと)をたなごころに治(おさ)めたもうゆえ、かつは藤原氏(ふじわらうじ)繁昌(はんじやう)のため、奈良(なら)の都(みやこ)に興福寺(こうふくじ)と申(まう)す氏寺(うじでら)を建立(けんりゆう)あるよしうけたまわる。われ小国(しょうこく)のものながら、君(きみ)の寵愛(ちやうあい)浅(あさ)からぬ、その高名(こうみやう)を日本(ひのもと)に残(のこ)さんため、なににても興福寺(こうふくじ)へ宝(たから)をよせたうせたくせうろう」と、おさおさしゆうこそおおせける。高宗叡聞(こうそうゑいぶん)ましまして、

「それこそやすき次第(しだい)なれ。さあらば日本(ひのもと)へ数の宝(かずのたから)を送(おく)るべし」と、御后(おんきさき)をともないて、宝(たから)のみ倉(くら)へ行幸(ぎやうこう)なる。栄華(えいが)の春(はる)もひとしおに、高麗(こうらい)・唐土(たうど)も日本(ひのもと)も、国土安全(こくどあんぜん)長久(ちやうきゆう)のめでたき試(ため)しときこえける。

さてそののちに皇帝(こうてい)は、御后(おんきさき)もろともみ倉(くら)に入(い)らせたま

年は十六歳、后妃の位にあり、はなやかな帳の内(うち)で大切にされています。雲竜閣(うんりゆうかく)や阿房殿(あほうでん)などの華やかな宮殿(きゆうてん)での生活(せいかつ)は、尊(そん)いお経(きやう)にある切利天(せりてん)や喜見城(きけんじやう)の楽(たの)しみを想像(さうざう)させるすばらしいものでした。

さて、后(こう)が帝(てい)に申(まう)し上げます。

「私の父大職冠(ちちたいしやくかん)は、臣下(しんか)ではありませんが、日本の政治(せいざ)を一手(いっしゆ)にあずかつており、国家(こくが)の繁栄(はんえい)と藤原一族(ふじわらういち)の繁昌(はんじやう)を祈(いの)って奈良(なら)の都(みやこ)に興福寺(こうふくじ)という氏寺(うじでら)を建立(けんりゆう)したと聞(き)きました。私も、あなたに愛(あい)されているしを残(のこ)すため、興福寺(こうふくじ)へ宝(たから)を贈(くわ)りたいと思(おも)いますが、いかがでしょうか」

高宗(こうそう)はしっかりとそのお話(おはなし)ぶりをお聞きになり、

「それはたやすいこと。では、日本(ひのもと)へすばらしい宝物(たからもの)を送(おく)ることにしよう」と、お后(こう)を伴(とも)って宝蔵(たからくら)へ出(い)かけました。中国(ちゆうごく)も日本(ひのもと)もともに栄(えい)えている御代(ごだい)のことであり

ます。

后(こう)と蔵(くら)に入った帝(てい)は、

①あらゆる宝物。

②中国陝西(せんせい)省華原の石で作った楽器。「八」の字形で、架(支柱)に横木を渡し、物をかけるようにしたもの)にひもなどでぶらさげ、打ち鳴らす。奈良興福寺に唐代の架と鎌倉時代補作の鑄銅製の華原磬が現存する。

③中国の泗水(泗川の名)辺から産出するという石。

④縦長の布を九すじ縫い合わせて作った袈裟。「僧侶が衣の上にはおるもので、左肩から右腋下にかけてマントのように着する」。

⑤香木の一で、白檀の心材の赤みがあったものなどをさす。紫檀や白檀より上などとされる。神仏の像を造るのに用いる木。

⑦約十五センチ。

⑧肉が付いた釈尊の遺骨。舞の本「大職冠」では「一にくしき(肉色)」。

⑨「方」は「直四角」、またその一辺の長さ。ここでは玉の径の意。舞の本「大職冠」では「方八寸の水晶の玉」に収めたとする。

⑩「なのめならず」の意。並々でなく。

⑪しとやかに。  
⑫(天子が)お感じになって。

いつつ、七珍万宝残りなく后のお目にかけても。多き宝のその中に花原磬・泗浜石・面向不背の玉とて、優れし宝さうろうなり。

「花原磬と申すは、打ち鳴らしてのそのちに声さらに鳴りやまず、とどめんと思ふとき、九条の袈裟をおおうなり。泗浜石は硯なり。この硯の徳用は、水なくして墨をすり、心のまに使うなり。さてまた面向不背の玉と申すは、赤梅檀の御衣木にて、五寸の釈迦を作りたて、肉付の仏舍利を御身に作り込めながら、方八寸の水晶の玉に収めたてまつる。いずかたより拝みても同じ正面なるにより、面を向こうに背かずと書いて、面向不背の玉と申すなり」

と、三つの宝の徳用を残らず語らせたまいける。后なのめに思しめし、

「かくありがたき御宝を、わが大君の恵みにて、今日日本へわたさんこと、身の喜びにてさうろう」

と、いとたおやかにとおおせける。皇帝勸感なされつつ、「さらば日本へ送るべし」

七珍万宝すべて后にお目にかけてましたが、たくさん宝の中に、花原磬・泗浜石・面向不背の玉という宝玉がありました。

「この花原磬というのは、打ち鳴らすとその音が鳴りやむことがない楽器である。止めるには、九条の袈裟でおおわねばならない。泗浜石は硯で、この硯が便利なのは、水がなくとも墨をすることができ、自由に使える点じや。また面向不背の玉というのは、赤梅檀の御衣木で五寸の釈迦を作り、肉付の仏舍利をそのなかに込め、それを八寸四方の水晶の玉に収めたもの。それゆえ、どこから拝んでもすべて正面に見えるので、面が向こうに背くことはないを書いて、面向不背の玉と名づけたのじや」

と、三つの宝の特色をすべて語ってくださいました。后はとても感心し、「こんなすばらしい宝を、わが君の恵みとして日本へ送ることができるのは私としても身に余る光榮です」

とたいへん優雅におっしゃいました。皇帝もお喜びになり、

「では、日本へ送ることにしよう」と、その使者をお選びになりました。

①北の方に向かう道。

②中国の州の名。山西省大同県。

③舞の本『大職冠』による。近松作『大職冠』

④『平家女護島』では「雲宗」。

⑤天子の命令。

⑥物を送るときにその内容を、送り主が受取人

⑦天子のお言葉をいただき

⑧名譽。

⑨海。

⑩竜族の王。竜神。仏法を守護するとし、密教

⑪では降雨祈願のときの本尊とする。

⑫人を害する恐ろしい魚

⑬竜・蛇などが受ける三つの苦。熱風、熱沙に

身を焼かれること、悪風に衣服を奪われるこ

と、金翅鳥（こんじちよう）に餌として食べ

られること。

⑭神秘的な仏像。

⑮うわさ。

⑯深海の底にあって龍神が住むという宮殿。

と、今度の使いを選びたもう。

それ大國の法にて、百人が大将を百戸と名づけ、官人とい  
い、千人が大将を千戸と名づけ、首領といい、万人が大将を万  
戸と名づけ、將軍とこれをいう。このたびの使いには、向北道  
の末、雲州國の大将・万戸將軍運宗とて大剛のつわものをめ  
され、右のあらまし勅諭ある。送り文をしたため、万戸にこそ  
はくださるる。万戸綸言こうぶり、ときの面目世のきこえと、  
喜びお受けを申しつつ、われに劣らぬ官人を、その数あまため  
し具して、日本さしてぞ登りける。  
これはさておき、ここにまたわだつみに住みたまう竜王は、  
悪魚眷属めし集め、  
「いかになんじらうけたまわれ。われわれすでに海底の竜王た  
りといえども、三熱の苦止むことなし。しかるところに唐土の  
重宝、面向不背の玉と申すは、赤梅檀の御衣木にて、五寸の釈迦  
の靈仏を納めたる宝の玉。大唐より日本へわたらせたまうと風聞  
あり。何卒して奪い取り、竜宮城の宝となし、三熱の苦しみを  
まぬがれんと思はうはいかに」

中国の法によれば、百人を従える大将を百戸と名づけ官人とよびます。千人を率いる大将は千戸と名づけ首領といえます。一万人の大将になると、万戸と名づけ將軍と呼ぶことになりま。今回の使者として選ばれたのは、向北道の先にある、雲州國の大将の万戸將軍運宗で、剛力のつわものです。この次第を説明して使者に命じ、送り文を作成して、万戸に与えました。万戸は帝の命を受けるのは光榮なことと喜んでその命令を受け、優秀な官人をたくさんひき連れて、日本をさして行きました。

さて、話は変わって、ここは海中に住む竜王の館です。竜王は悪魚の仲間を呼び集め、「よく聞けよ。われわれは海中の竜王とはいっても、三熱の苦を受けて止むときがない。ところが、いま、唐土の重宝、面向不背の玉という、赤梅檀の御衣木で作った五寸の釈迦の靈仏を納めた宝玉を唐から日本へ送ると聞いた。なんとか奪い取り、龍宮城の宝とし、三熱の苦しみから逃れたいと思うが、どうじや」と言いました。

① 急いで行き。

② 気色ばんで。怒りを顔にあらわして。

③ 貴重な宝物。

④ 人知では計り知れない不思議なちからをもっていること。

⑤ さからう。

⑥ 知っているとこ。情報によれば。

⑦ 大自在天。仏教では、仏法を守る神として、形ある世界の最も上位の世界の神。元来はインド神話の最高神。仏教では、大自在天神と訳され、天魔とされる。目が三つ、臂が八本で、天冠をいただき、白牛にまたがり、三叉戟（柄の先に三つ又に分れたかき状の刃のついた武器）を持つ。

⑧ (貴人の)ご命令。

⑨ 仏教で、仏法を守る神とされるが、絶えず闘争を好み、地下や海底にすむという。

とおおせける。悪魚<sup>あくぎよ</sup>どもうけたまり、

「こはありがたき御望<sup>おんのぞ</sup>み。この玉<sup>たま</sup>日本<sup>ひのもと</sup>へ送<sup>おく</sup>るならば、この海上<sup>かいじょう</sup>を通<sup>とお</sup>るべし。われわれ急ぎ<sup>いそ</sup>はせむかい、奪<sup>うば</sup>い取り申<sup>もう</sup>すべし」と、気色<sup>きしよく</sup>ほうてぞ申<sup>もう</sup>しける。

竜王<sup>りゅうおう</sup>きこしめし、

「かかるだいじの重宝<sup>ちゅうぼう</sup>、数千<sup>すせん</sup>万里<sup>ばんり</sup>の海上<sup>かいじょう</sup>をへだてて送<sup>おく</sup>ることなれば、大唐<sup>だいたう</sup>よりも、万戸<sup>まんこ</sup>将軍<sup>しょうぐん</sup>運宗<sup>うんそう</sup>とて神変<sup>しんぺん</sup>不思議<sup>ふしぎ</sup>のつわものにな少しも劣<sup>おと</sup>らぬ官人<sup>くわんにん</sup>を数<sup>すひやくにん</sup>百人<sup>ひゃくにん</sup>あい添<sup>そ</sup>えて昇<sup>のぼ</sup>すなれば、われわれが眷属<sup>けんぞく</sup>に、かれにたてつくものあらじ。それがしが存<sup>ぞん</sup>じには、魔<sup>ま</sup>醜<sup>けいしゅう</sup>首羅<sup>しゅら</sup>王<sup>おう</sup>は眷属<sup>けんぞく</sup>多<sup>おほ</sup>き王<sup>おう</sup>なれば、頼<sup>たの</sup>まばやと思<sup>おも</sup>うなり。この義<sup>ぎ</sup>いかに」と申<sup>もう</sup>さるる。

眷属<sup>けんぞく</sup>どもうけたまり、

「ご誑<sup>じょう</sup>もつとも<sup>とも</sup>にそうろう」と申<sup>もう</sup>す。

竜王<sup>りゅうおう</sup>聞<sup>き</sup>きたまい、

「さあらば阿修羅<sup>あしゅら</sup>を頼<sup>たの</sup>まん」

悪魚<sup>あくぎよ</sup>たちは、

「これはありがたいこと。この玉<sup>たま</sup>を日本<sup>日本</sup>へ送<sup>おく</sup>るときは、この海<sup>海</sup>を通<sup>とお</sup>るはずです。みんなで急ぎそこへ行き、奪<sup>うば</sup>い取りましよう」

と、色<sup>いろ</sup>めき立<sup>た</sup>って言<sup>い</sup>いました。竜王<sup>りゅうおう</sup>はそれを聞<sup>き</sup>いて、

「こういう大切な宝<sup>たから</sup>を数千<sup>すせん</sup>万里<sup>ばんり</sup>の海上<sup>かいじょう</sup>をへだてた国<sup>くに</sup>に送<sup>おく</sup>るために、中国<sup>ちゆうごく</sup>からは万戸<sup>まんこ</sup>将軍<sup>しょうぐん</sup>運宗<sup>うんそう</sup>という神変<sup>しんぺん</sup>不思議<sup>ふしぎ</sup>の力<sup>ちから</sup>を持<sup>も</sup>った豪傑<sup>ごうてつ</sup>とそれに劣<sup>おと</sup>らぬ官人<sup>くわんにん</sup>数<sup>すひやくにん</sup>百人<sup>ひゃくにん</sup>が警備<sup>けいび</sup>に付<sup>つ</sup>き従<sup>したが</sup>うという。しかし、われわれの仲間<sup>なかま</sup>でかれにかなう者<sup>もの</sup>はいない。わしの知り合<sup>しりあ</sup>いの魔醜<sup>けいしゅう</sup>首羅<sup>しゅら</sup>王<sup>おう</sup>には仲間<sup>なかま</sup>が多いので、彼<sup>かれ</sup>に頼<sup>たの</sup>もうと思<sup>おも</sup>う。どうかな」といいますと、魚<sup>うま</sup>たちは、

「おおせのとおりです」

と申<sup>もう</sup>上げました。その返<sup>こた</sup>事<sup>ごと</sup>を聞<sup>き</sup>いて竜王<sup>りゅうおう</sup>は「では、阿修羅<sup>あしゅら</sup>に頼<sup>たの</sup>むことにしよう」

①空間。そら。  
②ほんの一瞬の間。

③ほかのことではない。

④自分たちだけではなしとげにくい。  
⑤ひたすら。

⑥ていねい。

⑦たたかい争うこと。闘争。

⑧しごと。

⑨酒や肴でごちそうすること。宴会。雑餉(ざっしゅう)。

⑩潮の流れのぶつかる所。潮境と日本との潮境にあたる海。

と、虚空<sup>①</sup>をひらりと招<sup>まね</sup>きたまえば、修羅<sup>しゆら</sup>は眷属<sup>けんぞく</sup>ひき具<sup>ぐ</sup>して、刹那<sup>せつな</sup>が間<sup>あいだ</sup>に下<sup>くだ</sup>らるる。竜王<sup>りゅうおう</sup>大きに喜<sup>よろこ</sup>びたまひ、

「ただ今招<sup>いましょうたい</sup>待<sup>たい</sup>いたすこと、余<sup>よ</sup>の義<sup>ぎ</sup>にあらず。かようかよの次第<sup>しだい</sup>にて、万戸<sup>まんこ</sup>が玉<sup>たま</sup>を取<sup>と</sup>らんこと、われわれが力<sup>ちから</sup>に成<sup>な</sup>り難<sup>がた</sup>し。ひとえに頼<sup>たの</sup>みたてまつる」

といんぎんに申<sup>もう</sup>さるる。

修羅王<sup>しゆらおう</sup>聞いて、

「おお、小河<sup>しょうが</sup>を大河<sup>たいが</sup>となし、四天下<sup>してんか</sup>に雨<sup>あめ</sup>を降<sup>ふ</sup>らすことはかたがたにまさることあるべし。また闘争<sup>とうじょう</sup>合戦<sup>かせん</sup>のことわざは、われらが家<sup>いえ</sup>のものなれば、心<sup>こころ</sup>やすく思<sup>おぼ</sup>しめせ。万戸<sup>まんこ</sup>が船<sup>ふね</sup>を待<sup>ま</sup>ちうけ、玉<sup>たま</sup>を奪<sup>うば</sup>うてまいらすべし。その喜<sup>よろこ</sup>びには、竜宮城<sup>りゅうきゅうじょう</sup>にて雑掌<sup>ざっしょう</sup>あれ。乱舞<sup>らんぶ</sup>うとうて酒盛<sup>さかも</sup>りし、遊<sup>あそ</sup>ばんずるぞ」

とうち笑<sup>わら</sup>い、あまたの眷属<sup>けんぞく</sup>ひき具<sup>ぐ</sup>して、唐<sup>とう</sup>と日本<sup>にほん</sup>の潮境<sup>しほぎかひ</sup>、ちくらが沖<sup>おき</sup>にぞ待<sup>ま</sup>ちかけたり。かくとは知<sup>し</sup>らで、

万戸<sup>まんこ</sup>將軍<sup>しょうぐん</sup>運宗<sup>うんそう</sup>は、順風<sup>じゆんぷう</sup>に帆<sup>ほ</sup>を上げ船<sup>ふね</sup>こぎ出<sup>いだ</sup>す、

「日本の国<sup>ひのもと</sup>はそなた」

とこころざす。

と、空に向かつて招く様子を見せますと阿修羅が仲間をひき連れてたちまちのうちに姿をあらわしました。竜王は大いに喜び、

「いま招いたのは、他のことではない。これこれの次第で万戸將軍から玉を奪いたいのだが、力及ばぬので、ぜひ協力をお願いしたい」と丁寧<sup>ていねい</sup>に頼<sup>たの</sup>みました。修羅王は、

「なるほど。小さい河を大河にしたり、天下に雨を降らせたりすることはあなたがたの方がまさっているでしょうが、闘争や合戦となればこちらのもの。安心してくだされ。万戸將軍の船を待ちうけて、玉を奪ってみせましょう。うまくいきましたら龍宮城で宴会ですぞ。舞や踊りに酒盛りをして大いに遊びましょうぞ」

と笑いながら、たくさん仲間をひき連れて中国と日本の潮境にあたるちくらが沖で待っていました。

そんなことも知らず、万戸將軍運宗は、順風を待つて帆を上げ、船をこぎ出しました。「日本の国は向こうの方だ」

と東をさしていきます。

①空のはて。

②大空。  
③夜が明けきららない、早朝。

④これこそあの有名な。

⑤ちようどそのとき。

⑥大雨。「車軸」は車輪の軸。

⑦鉄。  
⑧戦いの時、手に持ち、または前に立てて、敵の攻撃から身を守るための板状のもの。  
⑨(雌鳥は左の翼で右の翼をおおうということから)左を上、右を下にして重ねならべること。  
⑩たてまわし。

⑪一番乗りで。

⑫通ることができないように関をもうける。

⑬欲しいと思う。所有したいと思っっている。

⑭船に設けた展望用の高樓。

⑮不安に。

渡海の波路はるかに行く船の、あとに入り日の影残る。雲のはたての天津空、月も浮かぶや沖津波、互いにかかる朝まだき、海はそなたか唐土の、船路の旅も遠からで、名にのみ聞きしこれやこの、ちくらが沖にぞ着きにける。

かかるおりふし、にわか一天かき曇り、雷電いなずましきりにて、車軸の雨をぞ降らしける。人々驚き見るところに、日頃はあるとも覚えぬ島一つ、海上に浮かび出で、旗一ながれひるがえり、おもてには黒金の楯をめぐり羽につきしとい、矢先をそろえ待ちかけたり。

万戸不思議に思いつつ、しばしためらうところに、大将と思しきもの、いちじんにかけて出し、天を響かす大音にて、「ただ今この沖に関をすゆること、貴殿の船中なる面向不背の玉、竜王のご所望なり。その御使いに魔醯首羅王向こうたり。急ぎ玉を渡されよ。さなくばなんじら一人も通すまじ」とぞ申しける。

そのとき万戸船やぐらにつつ立ち上がり、「フフ、さては今まではイギリス海賊なんぞかと心もとなく思

はるばると海を渡る船の後方には日が沈み、前方の雲がたなびく空には月が浮かび、沖には波が立っています。やがて、有名なちくらが沖に着きました。

その時、にわか空が曇り、雷やいなずまがしきりに起こり、豪雨になってきました。驚いて見ていると、見たこともない島が海上に浮かびあがり、旗がひるがえっています。島の正面には鉄の楯をめぐり羽の形に立て並べ、矢をそろえて、待ち受けていました。万戸將軍は不思議に思い、しばらく見えますと、大将と思われるものが出てきて、天を響かすような大声で

「このちくらが沖に関を設けたのは、貴殿の船に積んである面向不背の玉を竜王がご所望なされたからじゃ。その使いとして阿修羅がやってきた。すぐに玉を渡すように。さもないと貴様等を一人も通さぬぞ」と言いました。

そのとき、万戸將軍は船やぐらに立ち、

① ありがたいことに。

② 一騎または一人で千人を相手に戦うことができるほど強いこと。

③ 行かせまい。

④ ゆつたりと落ち着いて。

⑤ それなら。  
⑥ 腕前。

⑦ 鉄製の杖。  
⑧ 刃に波状の文があるもの。  
⑨ 大きな岩。

⑩ 運命の別れ道。

⑪ 戦いのための身仕度をして。

⑫ 調子づいて、さらにはげしく攻め。

いしに、修羅王とうけたまわれれば、ときにとりてはよき敵、喜び入りてさうろう。さりながら、かたじけなくも高宗皇帝より、数ならぬそれがしを一騎当千と頼まれ、この玉を預かり渡りさうろう道にて、竜宮へはえこそまいらすまじ。ぜひ欲しくば万戸を討って取りたまえ」

④とおうように申さるる。  
修羅王大きに腹を立て、

「さあらば手並を見せん」

とて、鉄杖乱刃の剣を降らせ、大磐石を飛ばすこと、雪を散らすにことならず。されども万戸は騒がずして、

「ここぞ一期の安否なれ。進めつわもの」

「うけたまりさうろう」

と、おのおの装束かためつつ、件の島にとび上がりとび上がり、いくさ花をぞ散らしける。されども敵は大勢にて入れかえ入れかえ攻めければ、今は万戸がつわもの残り少なに討たれける。修羅はいよいよ勝ちに乗り、残りしつわもの、四方へばつとおつ散らし、今ははや手に立つものもなし。

「フフ、今まではイギリス海賊かと思って手を出さないうでいたが、修羅王ならば、敵に不足はない。しかし、恐れ多くも高宗皇帝より私を信頼して預かった宝物。龍宮に渡したりはしないぞ。どうしても欲しいというなら、この万戸を討ち取ってからにしろ」

修羅王は腹を立て、

「では、手並を拝見しよう」

と、鉄の杖や乱刃の剣を降らせ、大石を雪のように飛ばしてきました。が、万戸は騒がず、「ここが大事なところ、ひるむなよ」

「うけたまわりました」

と、みな鎧兜に身を固めその島にとび上がり、はげしい戦いになりました。しかし、敵は大勢。次々に攻めてきますので、万戸將軍の軍勢は残り少なくなってきました。修羅王の方はいよいよ調子に乗り、残っていた万戸將軍の軍勢を四方へ散らし、もう手向かいする者もなくなってきました。

① 残念。どうせ死ぬ命ならば。  
 ② 自由自在に超人的な力が発揮できること。  
 ③ 金縷製の腕をおおって守るもの。  
 ④ 不詳。舞の本「大観」では「さはんやかん」とし、三摩(昧)耶戒(密教の戒の一。衆生は仏と平等一如という理で衆生を悟りに導くこと)と推量。  
 ⑤ 衆生を救う小具足。  
 ⑥ 衆生を救う仏の不思議な力を蓮の花にたとえた語。  
 ⑦ 口元を赤いひもで引き締めてはく、毛皮製の浅くつ。すべての衆生をあわれみ、いつくしむこと。  
 ⑧ すべて衆生を甘んじて受け、恨まなすこと。  
 ⑨ 太股のあたりを守り、よみの胴の下に垂れるようにつけられた部分。  
 ⑩ 最高の正しい悟り。仏陀の悟り。  
 ⑪ 不動明王などが手に持つ、悪魔を降服させる鋭い剣。  
 ⑫ 一けんみょうれん」とともに、阿修羅王が鬼に与えたという名剣。  
 ⑬ 一足は太刀の二箇所に設けた金具。これに白い毛に黒色、濃褐色などの毛がまじっていること。  
 ⑭ 四尺七寸八分。馬の丈は肩から足元までの高さで示し、四尺(二約一・二四)を標準とする。それより越えたが「七寸八分(二約二・三七)」であることをあらわす。  
 ⑮ 三センチ。六才になる。  
 ⑯ 馬の尾とたてがみになる。  
 ⑰ 以下、神通芦毛の様子についての記述)尻から見た様子。  
 ⑱ 横幅(が広いこと)。  
 ⑲ 尾のつけ根。  
 ⑳ あぶみうけ。  
 ㉑ ひづめの具合。  
 ㉒ 肉の付き方。  
 ㉓ 骨ぐみの具合。  
 ㉔ 馬の前足の内側にある節状のもの。これがあたる馬は夜行がきくという(記述)。「螺鈿(らでん)以下、馬具について記述)。「螺鈿(らでん)以下、漆細工の一種で、模様は貝の内側の真珠光がある部分を用いたもの。  
 ㉕ 乗馬のとき、人が尻をのせるための道具。  
 ㉖ 中国四川省で産出する、華麗な模様の絹織物。  
 ㉗ 鞍の上しく敷物。  
 ㉘ 青色の宝石、これを飾りにもちているか。  
 ㉙ 乗馬のとき、足を置く具、これにちているか。  
 ㉚ 未詳。後に「力」があることから、緑語的に用いたか。  
 ㉛ 鞍からあぶみを下げるための革。  
 ㉜ 「狸々」は中国で想像上の怪物。体は猿、声は小児に似て、毛は長く朱のような赤色、顔は人間のようで、人間の言葉がわかり、飲酒が大好きだとされる。鮮紅色の毛織物を「狸々餅」とよび、実際はいちじくの木につく虫をつぶした液で染めるが、古くから狸々の血で染めたといわれる。  
 ㉝ くつわを固定するために馬の頭から両耳を出すようにして進めるため、組紐や革で作る網(よ)。  
 ㉞ 馬をあやつり進めるため、くつわにつけた網(よ)。

急ぎ船に乱れ入り、くだんの玉を奪わんと、われもわれもと大海に飛び入り、われ先にと争いける。万戸このよし見るよりも、  
 「さて無念の次第かな。とても死なんず命ならば、魔醯修羅王とひき組んで、差し違えん」  
 と思いきり、急ぎ舟に飛び乗り、まず装束をぞしたりける。万戸がその日の装束には、神通遊戯の腕金、さばにやかいのすね当て、妙法蓮華の綱貫はき、忍辱慈悲の鎧を、草摺長に着くだし、阿耨多羅三藐三菩提の、五枚かぶとの緒をしめ、降魔の利剣の大刀、真十文字に差すままに、大とうれんという剣、足緒長に結んで下げ、万戸が秘蔵の名馬に、神通芦毛と名づけ、七寸八分明け六才、尾髪あくまで厚うして、追つさま向こう横端張り、尾口、承鍙、爪根のくさり、肉合、骨なみ、夜目の節、作りつけたるごとくなるに、らんでんの鞍をおき、蜀江錦の上しきに、瑠璃の鐙、りきしのちからがはをば、狸々の血にて染めたりけり。同じ色のおもがいかけ、黄金のくつわがんどかませ、錦の手綱えってつけ、波に沈まぬ浮き靴を、四つの

そこで、船に乱れ入り、目的の宝の玉を奪おうと、我も我もと大海に飛び入り、われ先にと争いました。万戸將軍はこの様子を見て、「無念だ。どうせ死ぬなら修羅王と差し違えて死のう」  
 と覚悟して、船に飛び乗り、船底につつと入り、鎧兜をつけました。万戸將軍のその日の装束はといいますと、神通遊戯の腕金にさばにやかいのすね当てをし、蓮華の綱貫をはき、仏の加護ある鎧は草摺を長めに着て、これも仏の加護ある五枚かぶとの緒をしめ、魔物をやつつけるための大刀を真十文字に差し、大とうれんという剣を下げ緒を長めにしてつけ、神通芦毛という名の秘蔵の名馬に乗ります。  
 この馬は七寸八分あり、明け六才、尾髪は厚く、どこをとつても超一流のがつちりした体格です。この馬にらんでんの鞍をおき、その上に蜀江の錦の上敷きをかけ、瑠璃飾りの鐙のつりひもは、狸々の血で染めた皮でできています。同じ色のおもがいかけ、黄金のくつわをかませ、それに錦の手綱をつけ、

- ①悪い行いと怒り。  
 ②真理に暗く、頑固なこと。  
 ③常に闘争して恥じないこと。  
 ④銭をならべたような模様があること。

- ⑤未詳。「道海浮」について、幸若「張良」では、鞭の名と解し、海を渡るとき、この鞭を腰にさすと、水底に沈まず、水もしみいらすとある。  
 ⑥死ぬこと。「九品」は仏教で、極楽に往生するために積んだ功德による九つの階級。  
 ⑦有名な乗馬の名人で、ゆきゆきとゆり動かせば。  
 ⑧馬を揺さぶれば。ゆきゆきとゆり動かせば。

- ⑨（弓を持つ手の意）左手。

- ⑩このうえなく自由自在。  
 ⑪正面からぶつかりあうけれども。

足にかけたれば、海の上を走ること、平地を行くがごとくなり。  
 修羅王このよし見るよりも、

「これこそ望むところなれ」

と、悪業瞋恚の鎧を着、無明堅固の甲の緒をしめ、鬪諍無残のほこを持ち、きりん王と名づけたる連銭芦毛の駒にうち乗り、万戸をめがけ、ただひと当てにと駆け出たり。万戸は名譽の馬乗りにて、海の上にて取る手綱、滄海浮・竜背浮、駒の双の耳をば、九品の鳥居と観念し、真一文字にかけ通す。修羅も聞こゆる上手にて、猛りきつたるこの馬を、手綱かいくり一騎ゆさむれば、よじよじよじと尻込みするところを、駒の足を乗り浮かべ、万戸をめがけかけ出だす。万戸は修羅を弓手に受け、横にのびた手綱きつと引き、一当て当ててかけ通り、西から東、北から南、縦横無窮にかけ合えば、万戸はきこゆる勇士にて、蝶とんぼうのごとくなれば、修羅はこのありさまを見て、

「神変不思議のつわものかな。今ははやかなわじ」

と、あとをも見ずして逃げて行く。万戸これを見て、

「やれ、汚し。返せ」

波に沈まぬように浮き靴を四つの足にかけてありますので、波の上を平地を行くように走ることが出来ます。

修羅王はこの様子を見て、

「望むところだ」

と悪業瞋恚の鎧を着、無明堅固の甲の緒をしめ、鬪諍無残のほこを持ち、きりん王という名の馬に乗り、万戸將軍をめがけ、一鞭あてて駆け出しました。万戸將軍は馬乗りの名人なので、海の上で馬に乗るときの手綱さばきはみごとなもの。馬のふたつの耳を鳥居と違って命がけに真一文字にかけていきます。修羅王もやはり名人で、元氣溢れるこの馬の手綱を取り、少し尻込みするのを海に浮かべて、万戸將軍をめがけてかけ出しました。万戸將軍は修羅王の攻撃を左手で受け、手綱を引き、西から東、北から南へと縦横無尽に戦いました。さすがに万戸將軍は名高い勇士だけあって蝶やとんぼのような活躍ぶりです。修羅王はこのありさまを見て、

「すばらしいつわもじゃ。とてもかなわぬ」

と、あとも見ずに逃げて行きました。万戸將軍はこれを見て、

「汚いぞ。引き返せ」

①ここが大事のせとぎわ。

②打ち逃げはさせまい。

③殊勝だ。

④大声。

⑤噂には聞いたが、見たことがない。  
⑥いくさの仕方。

⑦例の。

と駒を早めて追うて行く。向こうの島に駆け上がり、ここを先途ぞ戦いける。万戸、修羅がうつ太刀を受け流しつけ入りて、首宙に打ち落とせば、修羅の眷属これを見て、

「大将をうたせ余さじ」

と、鉾をそろえ切ってかかる。万戸につことうち笑い、

「おお、やさしし、なんじら」

と、とって返せばこらえかね、むらむらばつと逃げて行く。そ

のとき万戸大音上げ、

「修羅帝釈の戦いは音には聞けど目には見ず。今の万戸がいく

さ立て、その天帝の戦いにいくほどか劣らん」

と、独り言してそれよりも、くだんの船に乗りたもう。かの万戸

の御働き、諸天も恥ずるところやと、皆感ぜぬものこそな

りけれ。

と追いかけて行き、向こうの島に駆け上がって精一ぱい戦いました。万戸將軍は修羅王の太刀を受け、その太刀で返しますと修羅王の首は宙に飛び上がり、地に落ちていきました。修羅王の家来達はこれを見て、

「大将を討った奴を帰してなるか」

と、鉾をそろえて切りかかってきました。万戸將軍はにつこりと笑って、

「おお、殊勝な奴らじゃ」

と、こちらに向かつてきましたので、みないつせいに逃げて行きました。

そのとき、万戸將軍は大声で、

「修羅と帝釈天の戦いを見たことはないが、今の我々の戦いは、その帝釈天の戦いに優るとも劣らぬものであったろう」

と、語り、それから自分の船に乗りました。万戸將軍のすばらしい働きには誰も皆感心したと言ふことです。

## 大職冠 第二段

①ともに船を動かす人。船頭。

②長い波打ちざわと入り組み曲った浦。海岸線が長く続くようすをあらわす語。

③鳥の称。群を作つて海岸や川のあたりに棲む鳥の総称。

④未詳。「き」に「来」をかける。

⑤製塩のときに薪として使う木か。

⑥未詳。「み」に「見」をかける。

⑦旧国名。今の鹿児島県西部。

⑧長崎県島原半島にある火山群の総称。

⑨福岡県姪浜（めいのはま）の西から博多湾岸に沿つて延びる海岸の松原。神功皇后が新羅遠征のとき、松の枝を挿した地という。

⑩旧国名。今の香川県。

⑪香川県大川郡志度町の海岸。房崎浦。

⑫舟の櫓と櫓。

さるほどに、万戸將軍運宗は、諸天善神の御陰にて、危き難をまぬがれ、皆官人にいたるまで喜ぶこと限りなし。水主、楫取り帆を上げて、波路はるかにこぎ出だす。

あらおもしろの海上や。長汀曲浦の島々や。むれいる千鳥の友を呼び、ぱっと立つてはきどの島。塩木の桜若やかに、枝もたわわの夕がらす、連れて諸見の島を過ぎ、薩摩の国に入りぬれば、雲仙が嶽かすかにも、峯の白雲かずそいて、群れいる鷺もおのずから、生の松原あれとかや。風に吹かれて行く船の、はや九州を走り過ぎ、讃岐の国にきこえたる、志度の浦にぞ着きたもう。

かかりけるところに、はるか磯辺の方よりも不思議の物こそ流れくる。人々奇異の思いをなし、  
「波の浮木の捨て舟か。海女の塩木か」  
と見るところに、大船近く流れより、櫓にかかり止まりける。

さて、万戸將軍運宗は、諸天善神の力により、危ういところをのがれることができ、官人たちとともに喜び、舟乗りたちは、帆を上げて日本に向かってこぎ出しました。

美しい海の風景です。変化に富む海岸や島々は何とも言えないくらいです。千鳥が群れ飛び、きどの島の塩木にする桜の若木は美しく、夕方になるとその枝々にカラスがたくさん止まっています。島々を過ぎ、薩摩の国に入ると、雲仙嶽がかすかに見え、峯にかかると、白雲も増えていきます。群れ飛ぶ鷺もあれがいきの松原だと教えてくれるようです。風に吹かれて行く船は九州を走り過ぎ讃岐の国の志度の浦に着きました。と、そこへ、はるか磯の方から不思議な物が流れてきました。

「捨て舟だろうか。海女の塩木だろうか」  
と人々が不審に思いつつ見えていますと、船の近くに流れ寄り、櫓にひっかかって止まりました。

①大木の中をくりぬいて作った舟。古来、変化（へんげ）のものを入れて、人目につかないような海上はるかな沖に流す習慣があったという。

②わけ。

人人ひとびとこれを見るよりも、

「こは不思議なるうつほ舟ふね。いかがはせん」

とぞ申しける。万戸まんこき聞こしめし、

「さしもの広き大海たいかいに、この舟ふねに流れ止まること、いかさま仔細しさいのあるべし。割わって見よ」

とおおせける。

「かしこまりそうろう」

と、われもわれもと波打なみうちぎわへとび下り、てんでにさおをさしのべ、たたき割わって見てあれば、二八にはちばかりの上臈じょうろうのさもうちしおれたるばかりにて、涙なみだに暮くれてぞおわします。

人々ひとびとはつとあきれつつ、

「いかさま、これは修羅しゆらが執心しゅうしんあらわれて、美女びじよと変へんじうらみをなさんためならん。ただとにかくに殺ころせ」

とて、われ劣おとらじとかかりける。姫君ひめぎみこのよしごらんじて、

「のお、情なさけなや、人々ひとびとよ。迷まよい化生けしやうのものにてなし。わらわは奈良ならの都みやこのものなるが、思おもわぬ難なんにあいたげの、朋輩ほうばいのさかしらゆえ、かかる憂うれき身をみいたづらに、うつほ舟ふねにて流ながされしに、

③十六歳。  
④身分の高い貴婦人。

⑤執着する心。

⑥成仏できないもの。

⑦はげもの。

⑧「あいたげひとの意をかけるか。」

⑨同僚。

⑩讒言。

⑪つらい身。「浮き」とかける。

⑫意味なく。

人々はこれを見て、

「うつほ舟だ。どうしよう」

と言いい合あいました。万戸まんこき將軍しやうぐんは、

「この大きな海で、わさわさこの船に近寄ちかってきて止とまったのだからなにかわけでもあるのだろう。はやく中を割わって見よ」と命いのちじました。

「かしこまりました」

と、波打なみうちぎわへとび下り、てんでにさおをさしのべて、たたき割わって見ますと、十六ばかりの上品じゆんぴんなお姫ひめ様がうちしおれた様子ようすで涙なみだをながしていました。人々はびっくりして、「もしかしら、修羅しゆら王おうが美女びじよに姿すがたを変かえて報復ほうふくに来たのではないか。早く殺ころす方がいい」と、われさきにとびかろうとしました。が、姫君ひめぎみは、「なんと情なさけないことを。私は化け物まじものではありません。奈良ならの都みやこのものですが、仲間なつみだちの讒言せんげんのためにこうしてうつほ舟ふねで流ながされてしまったのです。」

①ちようどその時。

②私。

③さしつかえ。  
④ひらに。

⑤正体がないほど。

⑥かわいらしくて美しい。  
⑦宮仕えの女。

⑧強く恋をしてしまうこと。

いかなる縁にか人人に見とがめられ、ふたたび人間に会いぬると喜び思うおりからに、また一命を取らんとや。ああ、さりとは情なし。みずから女のことなれば命を助けたまいても、何のさわりのありやせん。ひらさら許しませ」

と、前後不覚に嘆かるる。万戸ほのかにご覧じて、「さてさていつくしき官女かな。唐土四百余州のその内に、かかる美女はいまだ見ず。日本は神国の印にて、かかるめでたき人もある」

と、そぞろにながめたまいしが、結ぶ思いに耐えかね、さしもかしこき万戸さえ、はかりごととは思ひもよらず、「いかに方々、ここは都近き国なれば、さようのこともありやせん。そのうえ女のことなれば、命を助け船へ移したてまつれ。それぞれ」とありければ、

「うけたまわりさうろう」

と、やがて御船へ乗せにけり。

姫君は夢のさめたる心地して、ただぼうぜんときれつつ、

ふしぎな縁で皆様の目にとまりふたたび人間に会えたと喜んでいましたのに、また命を取ろうとは、なんと情ないことでしょう。女一人の命を救ったところで、何の害がありませんか。どうかお許しください」と、正体もないほどなげいていました。万戸將軍はその様子を見て、

「さてさて、美しいお方ではありませんか。唐土四百余州の内にもこんな美女を見たことがありません。日本は神の国ですから、こういうすばらしい人もいるのでしょうか」と、一目惚れしてしまいました。あんなにかしい万戸將軍ですが、船旅の退屈さに耐えきれなくなり、これがはかりごとであるとはついで思い寄らなかつたようです。

「皆のもの、ここは都に近い国だから、そういうこともあるにちがいない。しかも、女のことだから命を助けて我々の船へ移してやることにしよう。さあ早く」と言いますので、皆は、

「わかりました」と、姫を船に乗せたのでした。

姫君は夢からさめたような心地で、ぼうぜんとしたまま涙を流してばかりいます。



① 拒絶して。

② 恋心ですつかりのぼせて。

③ 菊の異称。「辛さがまさり（増す）」に  
かける。

④ 牡の鹿。「さ」は接頭語。

⑤ 川の中にある島。「枕を」かわす」にかける。

⑥ 本心を隠していること。

⑦ 龍宮にいたるといふ仙女（姫君がここです  
でに「童女」と呼ばれている）

⑧ 事情。ことの次第。

⑨ つらい身。

⑩ 「末の行方も」知らない」にかける。

⑪ 賤しい身。「沈み」にかける。

⑫ 荒磯の海。「有り」にかける。

⑬ 成就しない。

⑭ 恋心がつづることを草が生い茂るのになたと  
えた言葉。

⑮ 自分の運命を嘆く。

ぬれ言葉。知らぬ名所の数数は、眺めの末も何かせん」

と、袖振り切つてぞ伏しにける。

万戸いよいよ登りつめ、

「さてさて、心強き御方かな。とうに辛さのまさり草。寝もせ  
で明かすさお鹿も、妻を恋うると聞くものを。いかなる神の縁  
により、御身と船に慣るること、一世や二世の縁ならずや。露

の枕をかわしまの、深き思いの数数を哀れと思しめすならば、  
心の忍びもうちとけて、語りなぐさみおわしませ。のう姫君」  
とよりそうて、しばしたわぶれくどきける。竜女はよしを聞  
きたまい、

「あらうつつなき御心。われは憂き身の果てしなき、末の行方  
も白波の、底とも知らぬしずの身に、何の思いのありそ海。

末も通らぬ恋草の、世にあらわれてはずかしや。許させたま  
え」

と身を恨み、身をかこち、情けあり氣にのたまえば、万戸なお  
なお氣をとられ、

「いかに姫、御身はさて、はかなきことをのたもうぞや。末も

と、袖をとる万戸將軍の手を振りきつてまた  
横になりました。

万戸將軍はさらに頭に血がのぼり、  
「さてさて、氣の強いお方。私の方は、辛く  
てなりませぬ。寝ずに夜を明かす鹿でさえ妻  
を恋うといひます。不思議なご縁で、こうし  
て同じ船にいるのですから、一世や二世の縁  
ではないでしょう。せめて、私の思いだけで  
も聞いてはいただけませんか。ねえ、姫君」  
と寄り添つて、たわむれつつくどきました。

龍女は、

「まあたわむれを。私はこのうえなくつら  
い身。これからどうなるかわからない賤しい  
身に、何の思いがありましよう。かなわぬ恋  
心が世にあらわれてはずかしいことです。お  
許しください」

と自分の境涯を恨んだりなさけながつたりし  
つつ、恋心があるように言うので、万戸はい  
つそう氣をひかれ、

「姫君、あなたはなんと頼りなげなことを言  
うのですか。かなわぬ恋とはどういうこと  
ですか。千年万年たつても、あなたさえ心  
が変わらないなら、私は決して心を変えませぬ」

① 永久に変わらず緑を保つ松。

② 袖を引き押さえて。

③ かくしごとのない本心。

④ いや。

通らぬ恋草とは、いかなることにておわします。千年万世を過

ごすとも、君さえ心変わらねば、それがしが身の上は、常盤  
の松にあらねども、何しに変わりあるべき」

と、袖を控えて申しける。竜女はよしを聞くよりも、

「まことうらなき御心入り。さほどに思しめすならば、みずか  
らも望みのせうろう。御かなえそうらわば、何しにいなと申す  
べき」

と、いとしおしおと申さるる。万戸聞いて、

「御身の所望とあるからは、一命とても何ならず。いかにいか  
に」

と申しける。その時竜女、

「この御船に天竺の釈迦の像ましますよしをうけたまわる。一目  
拝ませたびたまえ」

万戸はつと赤面し、しばしは物も言わざりしが、ややありて  
申すよう、

「いかにもこの玉拝ませたくはそうらえども、これ仏体色相の  
玉なれば、女人の拝み申しては、かえつてとがをこうぶるなり。

⑤ 仏の本体を五官(目・鼻・耳・舌・皮膚)で  
捉えられる形にあらわすこと。

⑥ とがめ。罰。

と、袖を引いて言いました。龍女はそれを聞いて、

「本当にありがたいお心でございます。それほどに思ってくださいましたら、私にも望みがございませぬ。それをかなえてくださるのでしたら、いつまでもいやとは言いませんよ」と、しおらしく返事しました。万戸將軍はこれを聞いて、

「あなたのお望みでしたら、私の命でも差し上げましょう。どういってお望みですか」と聞きました。龍女は、

「では、この船に天竺の釈迦像があると聞いております。ぜひ、一日拝ませてくださいませ」

と返事しましたので、万戸はつとして、しばらく物も言えませんでした。ややあつて、「なんとか、拝ませてあげたいとは思いますが、これは仏の本性を玉の形にしたものですから、女の人が拝んだりしては、かえつて罪を得ることになります。他の望みならなんなりと」

①そらとぼける。

②「小乗」は仏教の二派の一。衆生救済を願う大乘に対し、修行により自己の解脱を求める立場。「阿含」は釈迦の説の総称。「小乗阿含」は小乗の経典、小乗の教え。  
③悟りの境地にいたって死ぬこと。  
④女人がもつている仏教上の五つのさしさわりの梵天王・帝釈天・魔王・転輪聖王・仏身になりぬこと。

⑤大乘の経典。  
⑥古代インド舎衛国の波斯匿王の娘。父に勧められて仏陀に深く帰依し、仏陀の加被力を得て法を説いたという。

⑦古代インドの摩訶陀(マガダ)国王の頻婆娑羅(ピンバサーラ)の后、子の阿闍世(アジヤータシヤトル)に幽閉されたとき、仏陀に浄土往生の道を示したという。  
⑧釈尊の叔母であり、養母でもある。後には釈尊に帰依して妃耶輸陀羅(やしゆだら)と共に比丘尼教団を開くに至った。

⑨未詳。「首陀羅(インドのカースト制で、最下位とされるスードラ)」の女の意か。  
⑩仏教で、過去・現在・未来。また、前世・現世・来世。

⑪仏教で、修行僧。  
⑫尼僧。  
⑬在俗の男子の仏教信者。  
⑭在俗の女子の仏教信者。  
⑮十方に無数に存在する衆生の世界。  
⑯仏の教えを守ることなく、勝手気ままな。  
⑰竜女に言いつたことをさす。

別の望みをしたまえ」

と、空うそぶいてぞ申しける。竜女聞いて、

「ええ、こはおろかのおおせかな。いかに女人の身なればとて、

仏の教えを知るまじきや。もつとも小乗阿含のときは、女人

成仏かなわずとて、五つのさわりを説きたもう。されども大乘

海会にて、女人成仏疑いなし。そのみならず、勝鬘夫人、

韋提希夫人、憍曇弥、修多羅女、いずれも悟りを開きたもう。

そのほか三世の諸仏にも、女人の御弟子あればこそ、比丘比丘尼、

優婆塞優婆夷と説きたもう。もとより仏の御慈悲は、十方世界

もらさじの御心にてましますゆえ、面向不背の玉ならずや。

姿は女人と生まるとも、信心まことあるならば、みだりなる

夫にははるかにまさり申すべし。ことに邪淫破らせたもう御身

こそ、仏のとがもありやせん。この望みかないがたくそうら

わば、いかにおおせあるとても、何しになびき申すべき。えつ

え、つれなき人の心や」

と、うらめしそうに嘆かるる。万戸もときの道理につめられ、

何とも返答せざりしが、

と言いましたが、龍女は、

「なんとおろかなことを。いくら女の身だとい

っても、仏の教えを知らないでも思っているのですか。小乗阿含経では、女人は成仏

できないといつて五つのさわりを説いています。しかし、大乘海会経では、女人成仏は疑

いなしと解いています。そればかりか、勝鬘夫人、韋提希夫人、憍曇弥や修多羅女など女

性で悟りを開いた方もたくさんいらっしゃいます。そのほかにも、三世の諸仏には女性の

御弟子があり、比丘には比丘尼、優婆塞には優婆夷がいるではありませんか。仏の慈悲は、

十方世界、くまなく照らすもの、それだからこそ面向不背の玉というのではありませんか。

姿は女人と生まれても、まことの信心があれば、不信心な男よりはるかにまさるはずで

す。あなたのように邪淫戒を破った方こそ、仏の罰を受けるのですよ。この望みをかなえて

くださらないのでしたら、何をおっしゃつても言うことを聞いたりはしません。ほん

とうにつれない方ですこと」

と、うらめしそうに嘆いています。万戸將軍はその理にかなった言葉に何とも返答できな

いでいました。やがて、

- ①無理矢理中断する。  
②つまらない。

「これほどまでなりたる恋路を、むげにおかんもよしなし。そのうえ船中にて一目見することなれば、何のしさいもあるまじき」

と、姫君にうち向かい、

「これかないがたき所望なれども、いとおしみ深き人の望みなれば、いかにも拜ませ申さん」

- ③四本または六本の足のついた大形の箱状の物入れ。

- ④王に国政をかえりみることを怠らせるくらい的美女。

と、封じおきたる石の唐櫃より水晶の玉を取り出し、竜女の方へ渡せしは、げにやまことに傾国の色に傾く世の習い。竜女は玉を受け取り、

- ⑤ガンジス川のこと。  
⑥魚。

「あらありがたのみ仏や。十方恒河のうろくずまで、皆成仏の縁ならん。日ごろの願いかないたり。これまでなりや人人」

- ⑦「一ひろ」は約一・五メートルまたは一・八メートル。

と、言うかと思えば、たちまち二十ひろの大蛇となり、海中に飛び入りしは、すさまじかりける次第なり。万戸このよしご覧じて、

- ⑧失敗し、驚いたとき、また、成功を祈るときにとつぎに言う言葉。  
⑨だまされた。

「南無三宝、たばかられたり。口惜しや」

と、おどり上がり飛び上がり、海上をにらみつけ、齒がみをなしてぞいたりける。されども心をとりなおし、

「これほどまでの恋心を捨ててしまうことはもはやできない。だいいち船の中だから一目だけ見せても大丈夫だろう」と考え直して、姫君に向かい、  
「そこまでおっしゃるのでしたら、他ならぬあなたのお望みですし、なんとか拜ませてあげましょう」

と、封じておいた石の唐櫃から水晶の玉を取り出し、龍女の方へ渡しましたが、まさに美女は国をも傾けるといふことわざどおりのふるまいです。龍女は玉を受け取り、

「ああありがたい仏でございます。十方恒河の魚までもこれに導かれて皆成仏することができます。日ごろの願いがかないました。では、これにて失礼いたします、皆様」

と、言うやいなやたちまち二十ひろの大蛇に変身し、海中に飛び入りました。まことにすさまじい限りです。

万戸將軍は、

「南無三宝、だまされたか。口惜しいこと」と、おどり上がり飛び上がりして、海上をにらみつけ、齒がみしていました。しかし、気をとりなおし、

①上京。奈良の都に着くこと。  
②手紙。書状。

③残念。  
④あきらめ。

「とにかく京都へ上着し、ご書札をさし上げ、そのうえにて腹  
かき破り死すべきなり。急ぎ帆を上げ櫓を押せ」  
と、無念ながらも思いきり、都を差してぞ急がる。かの万  
戸の心の内、口おしきともなかなか申すばかりはなかりけり。

「とにかく都へ行き、皇帝からのご書状をさ  
し上げ、そのうえで腹を切つて死ぬしかない。  
急ぎ帆を上げ櫓を押せ」  
と、無念に思いながらも、都へと急ぎました。  
その万戸將軍の心の内はどんなにかくやしか  
ったことでしょうか。

# 大職冠 第三段

- ① 君主に代つて政治を行う人。鎌足。
- ② 大化三年(六四七)に制定された七色十三階の冠位の最高位。天智七年(六六九)に藤原鎌足が死の直前に授けられたのが唯一の例。
- ③ 常時、天皇を補佐し、左右大臣に次ぐもの。
- ④ 鎌足の次男不比等。淡海公は死後に贈られたもの。
- ⑤ 皇室。
- ⑥ 日本。

⑦ 藤原氏の氏寺。前出。

⑧ 特に数え上げるほどの価値ある宝。前出。

- ⑨ 朝廷からの書状。
- ⑩ 日本。
- ⑪ 仏縁を得るものとなるとてもよい行い。ここでは寺を建立すること。
- ⑫ 紅白女。鎌足の娘とされる。
- ⑬ 僧が日常用いる道具。
- ⑭ 前出。
- ⑮ 「けばん」は野紙を印刷するための版木。お経を印刷するための費用か。
- ⑯ 死者の霊に供える香に代えるお金。
- ⑰ 天子の意向。
- ⑱ 上意(身分の高い人の意志)を受けて下に通達すること。
- ⑲ 以上のとおり。公文書の決まり文句。
- ⑳ 文武・元明天皇朝の年号。七〇五年。
- ㉑ 左近衛の少将。
- ㉒ 未詳。

さてそののち、そのころ日本の摂政、大職冠鎌足公、その御子を内大臣淡海公と申したてまつる。数代朝家の近臣にて、わが秋津洲の内のみか、人の国までかくれなく、唐の高宗皇帝を婿君にとりたてまつり、栄華のほまれ世に高く、奈良の都に居住ある。とりわけこのごろは、興福寺と申す氏寺を建立なされ、ようよう造営こと終らんとするおりふし、唐土より万戸將軍運宗渡り、すぐにご殿に参入し数の宝ならびに御朝札をささげたてまつる。鎌足大悦浅からず、急ぎご覧あるに、「このたび、今度利国において起立塔造の大善根御営みのよし、唐土に隠れなく、後の達請により興福寺へ常什物のため、花原磬・泗濱石・面向不背の玉、けばんの料に錦千反、香典に砂金十万銀、贈り遣わす旨、天機によつて執達、くだんのごとし。慶雲二年五月十日、左少将きんいつき大日本国鎌足公へ」と書きとめたり。

さてそのころ、日本では、大職冠鎌足公の子である内大臣の淡海公が摂政として政治をとっていました。鎌足公は、数代続く朝廷の近臣であり、日本のみならず他国までもその名は鳴り響いているうえに、唐の高宗皇帝が婿君にあたるというわけで、栄華のきわみにあります。その邸は、奈良の都にありました。さらに、近年、興福寺という氏寺を建立され、唐土よりお祝いの使者として万戸將軍運宗がやってきました。すぐに邸に招き入れ、数々の宝と皇帝からのお祝いの言葉をいただきます。鎌足公は大いに喜び、すぐに皇帝からの手紙をご覧になりました。「このたび、そちらのお国では、立派な寺を造営されたとのこと、まことすばらしいことで、わが国でも話題になっております。また、後のたつてのお願ひにより、興福寺へのお祝ひとして  
花原磬  
泗濱石  
面向不背の玉  
けばん用の錦 千反  
を送り、香典として  
砂金十万銀

ときに鎌足、送り文にのせられたる三つの宝をご覧あるに、  
花原磬・泗濱石、二つの宝は京着し、面向不背の玉はなし。と  
きに鎌足公、万戸將軍に向かい、

「はるばるの波濤をしのぎ渡らるること、苦勞千万苦勞千万。  
さて送り文の三つの宝の内、面向不背の玉と申すはいずれの宝  
にてそうろうぞ」

万戸はつと思いが、じつと心を沈め、

①高貴の人の前。  
②あやまり。まちがい。  
「さんぞうろう。この玉につき、いろいろようすごぞそうろう。  
何とも御前にて申し上ぐべきようもなくそうろう。また申さね  
ばことのわけ、非そうらわず。途方に暮れそうろう」  
と申す。

鎌足聞こしめし、  
「何とも万戸が申し分心えがたし。ありのままに申されそうら  
え」

③日本・中国・天竺（インド）。  
万戸かしこまり、  
「さんぞうろう。この玉は三国にならびなき重宝ゆえ、高宗も  
これを秘蔵し、昇されそうるところに、竜宮城 伝え聞き、

を贈ります。

以上は皇帝の名により、執筆がしたためま  
した。

慶雲二年五月十日

左少将きんいつき

大日本国鎌足公

と書いてあります。そこで、鎌足公は、手紙  
に載っている三つの宝をご覧になりましたが、  
花原磬・泗濱石の二つの宝はあるのに、面向  
不背の玉はありませんでした。そこで鎌足公  
は万戸將軍に向かつて、

「はるばる海を越えてこられるには、たいへ  
んな御苦勞があったことでしょう。ただ、お  
手紙の中にある三つの宝のうち、面向不背の  
玉というのはどの宝でございましょうかな」  
と尋ねました。万戸將軍ははつとしましたが、  
心を落着かせ、

「はい、この玉についてはいろいろと訳がご  
ざいますが、御前では申し上げかねます。と  
いって、申し上げませんと理由をわかっ  
ただけませんか。途方に暮れており  
ます」

と申し上げました。鎌足公はそれを聞いて、  
「よくわかりませんが、ありのままをお聞か  
せください。」

と言いました。万戸將軍はかしこまって、  
「はい。この玉は三国にならぶもののない貴  
重な宝で、高宗皇帝の秘蔵の宝です。それを  
日本に運ぶということを龍宮城の魚たちが聞  
きつけて、修羅王を語らって我々を待ちうけ、  
ちくらが沖で合戦になりましたが、なんとか

① かわれかけた小船。

② 内裏。

③ あわれ。

④ 死んだならば。

⑤ かねてからの思い。  
⑥ 冥土。

⑦ 自殺。

⑧ 乱暴。

⑨ とめた。

魔醯修羅王を語らい、それがしを待ちうけ、ちくらが沖にてす  
でに合戦におよび、十死一生の戦いにてござさうろうを、それ  
がしずいぶん武力をはげみ、敵をしりぞけ、ようよう日本の  
ご領内、讃州房前の沖へ入船つかまつりさうろうところに、一葉  
破舟に美女一人乗り、『日本奈良の都のものなるが、ほうばい  
のざんげんにて禁中を追い出され、万里の滄海に沈む身なり。  
ふびんをくわえくれよかし』と、さまざま申しさうろうを、  
竜女とは知らずたばかられ、思わぬ不覚をつかまつり、玉を  
奪われ申しさうろう。そのせつすぐに海中へ飛び入り、このう  
らみを散ぜんとぞんじさうらえども、それがし途中にて空しく  
なりさうらわば、皇帝の素意をも日本へ伝え申さず。その罪黄泉  
のすえまでもおそろしくぞんじ、さてこそ面目なくさうらえど  
も、これまで上着つかまつりさうろう。今ははやこれまでな  
り」  
とすでに自害と見えければ、御前の人人とりつき、  
「いまだ御許されもなきにろうぜきなり」  
と制しける。

撃退しました。そして、やっと日本の領内に入り、讃州房崎の沖へ入船したときに、破れ舟に乗った美女が一人やってきました。『奈良の都のものであるが、同僚の讒言によって宮中を追い出され、海に流されたので、助けしてほしい』などいろいろのことを言うのです。その女が龍女の化身とは知らず、その言葉にだまされ思わぬ不覚をとって面向不背の玉を奪われてしまいました。そのときすぐに海中へ飛び入り、このうらみを晴らそうとは思いましたが、しかし、私が使いの途中で死んでしまったのは皇帝のご意向を日本へ伝えることができせん。その罪は死んだあともついてまわると思っておそろしくなり、なんと面目ないことではあります。ここまでやってきたわけです。しかし、これで役目は果たしました」  
と言って自害しようとするので、御前の人々はとりついて、  
「まだお許しもないのに」  
と止めました。

①その場の全員。

②方法。  
③だませば。

④中国。

⑤ことを初めの予定通り、元にもどす。

⑥あわててまちがいをおこす。

⑦たいそう。

⑧正しいことと間違っていること。

⑨返事の手紙。

鎌足公かまたりこうしばしがほどは、とかくの御言葉おことばも出されず。満座まんざひつそと沈しずまつたり。ややあつて鎌足公かまたりこうとつそくの息いきをほつとつき、「いかに万戸まんこ、たとえば神通じんづうの聖者しょうじやにても、手立てだてをかえてたばかれば、はかりごとに落ちおちるならい、漢家かんか・本朝ほんちようその試ためし少すくなからず。しかるうへは身みをまつとうして、破やぶりそこなわず、<sup>⑤</sup>ことを本意ほんいにししかえすを、良将りやうしようとも、また勇士ゆうしともいえり。ただ今いまそこのふるまい、さすが高宗皇帝こうそうこうていに一騎当千いつきとうせんと頼たのまれ、一方ひとかたの大將たいしようともなるべき身の近頃ちかごろもつて不覚ふかくなり」と、理非明白りひめいはくにおおせければ、万戸まんこを始めこの君きみの御智恵おんちえ、大海たいかいにのぞむがごとし。さすが日本ひのもとの一ひとの人、天晴諸人あつぱれしよじんの冠かんたりと、おのおの感じかんじてまつる。鎌足重かまたりかさねておおせけるは、「もつとも不背ふはいの玉京たまきやう着やくせずといえども、既すでに日本ひのもとの地ちに入りて失うしないたることなれば、かつうは万戸まんこが本意ほんいのため、三みつの宝たから到来とらい」のよしご返札へんさつを下くださるれば、万戸まんこ面目めんぼくほどこして、「かたじけなし」

しばらくの間、鎌足公は何も言わずにいました。居合わせた人々もひっそりとその言葉を待っています。やがて鎌足公はため息をつきながら、

「万戸將軍よ。どんな聖人でも、上手に計画されたはかりごとであればひつかかるもの、そういう例は中国にもわが国にも少なからずあります。こうなつたうへは、生きながらえて、なんとか元通りにするよう努めるのが良将たるもの、勇士たるもののふるまいでありましょう。とはいえ、せっかく高宗皇帝に一騎当千のつわもと頼みにされ、万人を率いる大將としてはなんとも不覚なふるまいでありましたなあ」

と、理非明白に言いましたので、万戸將軍はその堂々とした態度に恐れ入るばかり。さすがは日本の一の人、人々の頂点にある人と、居合わせた人々も感心していました。鎌足公はさらに、

「もつとも面向不背の玉が到着していないといっても、日本の地に入ってなくなったことですね。万戸將軍の面目もありましょうから」と配慮して、

「三つの宝到来」

という返札状を書いて渡しました。万戸將軍は面目が立った思いで、

「かたじけのうごいいます」

① 残念な。  
② すばらしい。

③ 父の一族・母の一族・妻の一族、または父母・兄弟・妻子、父・子・孫など、三種の親族にまで罰せられる刑。

④ 言い伝えられる。

⑤ どうしようか、こうしたらよいだろうか。

⑥ 神の考え。  
⑦ 人目につかないようにしたいので。

⑧ 夜中。  
⑨ 奈良市春日野町にある春日神社。藤原氏の氏神。

⑩ 仏を礼拝するときに唱える言葉。仏に帰依し、自分の頭を仏の足につけて礼拝する意。  
⑪ 春日神社には武甕槌命(たけみかずちのみこと)・斎主命(いらいぬしのみこと)・経津主命(ふつぬしのみこと)・天兒屋根命(あまのこやねのみこと)・比女神(ひめがみ)の四神を祭る。  
⑫ 悲しみあわれむこと。

と御前を立ち、唐土さしてぞ下りける。

さるほどに内大臣淡海公、一間に入らせたまいつつ、つくづく思しめすようは、

「さても本意なき次第かな。かかるめでたき重宝を、不思議に日本に渡されしを、竜女に取られしこと、万戸が不覚といいなから、このこと高宗皇帝へありのままに叡聞あらば、万戸は三族の刑にあうべきこと、ふびんに思しめされしゆえ、父・鎌足公のご返札に、『三つの宝到来す』と書かせたもうはことわりなり。さそうらいながら、この玉日本に渡らせたまわぬをあると返状なされしこと、のちの世までの人口に残らんことも口おしや。とやせんかくやあらまし」と思わすらいたまひける。

かかる大事はとにかくに神慮に任せたてまつらんと、昼は人目もつつましなければ、夜半にまぎれてただ一人、春日の社へ参る。お山になれば、

「婦名頂礼春日四所大明神、願わくば哀愍納受ましまして、竜女に取られしこの玉を、ふたたび日本へ渡させてたびたま

と挨拶して御前を立ち、中国に帰って行きました。

さて、その後、内大臣淡海公は別室に入りつくづくと考えました。

「なんとも面目ないことではないか。こんなすばらしい宝物をせっかく日本に送られたのに龍女に取られたのは、万戸將軍が不覚をとつたためではあるが、しかし、高宗皇帝がありのままのことをお聞きになれば、万戸將軍は三族の刑にあうにちがいない。それを不憫に思い、父鎌足公は『三つの宝到来す』という返札状をお書きになったわけで、それは当然の配慮であった。とはいっても、この玉が日本に渡っていると返事したことが後世まで人々に語られていくのも残念なことではある。どうしたらいいであろうか」といろいろに思わすらうたのでした。そして、こういう大事なことはともかく神様のお告げを聞いてからにしようと思ひ、昼は人目もあるので、夜、ただ一人で、春日大社へ参詣しました。

神社に着くと、  
「婦名頂礼春日四所大明神、なんとか、お願いでございますから、龍女に取られたこの玉を、ふたたび日本へもどしてくださいませ」

① 神仏に祈り請うこと。祈願。

② 厳肅でこつこつして。  
③ 一日中。

④ 神に仕える人。

⑤ 公家の正装。冠を着け、指貫をはく。

⑥ 心から信心して。

⑦ 神を尊んだ呼び方。  
⑧ けなげにも。

⑨ 殊勝。  
⑩ 誠意。

⑪ 正直な人には神の加護がある。

⑫ 確実なこと。

え」

と、深く祈誓をなされつつ、かたわらにただずみ、春日山の風景をしばしながめておわします。さらでだに宮寺は、深夜の鐘の響き、ご燈の光なんどにて、神さび心も澄みわたるに、終日のその内は貴賤群集の参詣も、いづれの家にか宿りけん。巫覡が鼓も声おさまり、杉むらばかり立つ中に、神風そよとおとずれて信心澄めるおりふし、衣冠正しき貴人、白き鹿にめされ、さかきの枝をむちとして、ゆるぎ出させたまいける。淡海信心肝に命じ、頭を地につけおわします。

ときに貴人、

「われはこれ当社明神なり。なんじやさしくも朝家を守護したてまつる、その志まことあり。万戸が取られし不背の玉、身ひとりの悲しみとなげくことこそ神妙なれ。かかるまことを見るからは、神は正直の頭に宿らんの誓願、いかでか空しかるべき。なんじ急ぎかの地におもむき、心をくだくほどならば、こころやすくこの玉を取りえんことは治定なり。ただ頼め。われ世の中にあらん限りは」

と、深くお祈りをし、しばしたたずんで、春日山の風景をながめていました。そうでもなくとも宮のうちは深夜の鐘が響き、御燈明の光のなかでなんとも荘厳に感じられ、心も澄みわたってきます。日中にぎわっていた参詣の人々もそれぞれの家や宿にもどったのでしよう。神官の鼓の音もやみ、杉の木ばかりが見えるところに、神風がそよそよと吹いて、いよいよありがたい気持ちになって折、ありがたいことに、衣冠を正しく身につけた貴人が、白い鹿に案内されながらさかきの枝を手にとってあらわれ出でました。淡海公は信心深く、頭を地につけております。貴人が言います。

「私はこの神社の明神である。そなたがいま朝廷を守護しているその志は本当にすばらしい。万戸が取られた面向不背の玉のことを自分一人の悲しみと思つてなげいているのはまことに神妙なことである。そういう誠実な姿を見た以上、神は正直の頭に宿るとい言葉のとおり、その願いを必ずかなえてやろう。急ぎ、その志度の浦におもむき、必死に方策を求めれば、必ずやこの玉を取り返すことができよう。ひたすら、神に祈るがよい。世にある限りは味方になるぞ」

①空中。  
②南側の御殿。

③春日神社から自宅にもどること。  
④宮殿。

⑤少しでも早く。

⑥貴人に付きしたが、色々な用事をする人。  
⑦讃岐の国。今の香川県。

⑧旧国名。今の兵庫県の南西部。  
⑨兵庫県の掛保(いぼ)郡御津町にある港。瀬戸内航路の大事な港であった。  
⑩月の初めの十日間。上旬。

⑪ちよつと。  
⑫船に乗せてもらうこと。

⑬身分のいやしい者。  
⑭塩を焼くための木。

⑮何事も知らないような様子。

と、のたもう声の内よりも虚空飛行なされつつ、南殿の雲に入りたもう。ありがたかりける次第なり。

淡海奇異の思いをなし、はるかに御あとを礼しつつ、御殿をさしてぞ下向ある。御所にもなれば、

「このうえは片時も早く急がん」

と、旅の装束なされつつ、舎人も連れずただ一人、讃洲さしてぞ下らるる。ようよう行けば今ははや、播磨の室津に着きたまひ、渡海の船を待ちたもう。ころは八月初旬にて、海上波風荒うして行き交う船も見えざれば、いかがはせんと思しめし、しばしただずみたまうところに、小船に柴を積み、老人手づからるを押し波にただよいこぎ出す。淡海うれしく思しめし、

「いかに老人、その船にそと便船申さん」

とおおせける。

老人聞きて、

「さんぞうろう。これは旅人を渡す船にてはなし。しづが塩木を運ぶ船にてぞうろう」

と、さらぬ体にてこぎて行く。そのとき淡海扇を上げ、

と、いう声とともに空に飛び行き、南殿の雲のなかにかくれてしまいました。まことにありがたいことです。

淡海公はふしぎに思いつつも、そのあとを伏し拝み、自分の邸へともどっていききました。邸に戻ると、

「こうなった以上、できるだけ早く行く」と、旅の用意をして舎人も連れずただ一人で讃洲をさして下つて行きました。

急ぎましたので、すぐに播磨の室津の港に着き、瀬戸内海を渡るために船を待っていました。しかし、八月初旬の頃で、海の波が荒く、なかなかよい船も見えません。どうしたらよいだろうかと思つてしばらくたつたずんで見えませんでした。老人が一人で櫓を漕いでいます。淡海公はうれしく思い、

「御老人、その船に乗せていただけませんか」と言いました。老人は聞いて、

「はい。しかし、この舟は旅人を乗せる舟ではございません。塩木を運ぶきたない舟でございます」

とそしらぬ顔で漕いでいこうとします。淡海公は扇を上げて、

①歌を作ったことをいう。

②「むろつみやかまどを過る舟なれば物を思ひにこがれてぞゆく」(経信集)をふまえた歌「むろつみ」は、地名(現在の山口県光市・天然の良港)と客舎の意の「むろつみ」をかいたもの。一首の意は、室積へ塩木を運ぶ舟であるからだろうか、塩木は燃やすものであるが、そのように、思い焦がれて行くようである。

③歌をよんだところ。

④優雅な心を持たないやしい樵夫の心さえもやさしくさせるのは歌である。『古今集』仮名序による。

⑤「古今集」の「天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも」(安倍仲磨)を踏まえる。遣唐使の一員として中国に渡ったが、帰国できず、日本を恋しく思つて詠んだ歌とされる。

⑧香川県さぬき市志度にある地名。

「しばししばし」

と招か<sup>まね</sup>せたまい、かくこそ連ね<sup>つら</sup>たまいきる。

②「室積<sup>むろづみ</sup>や 塩木<sup>しおぎ</sup>を運ぶ<sup>はこ</sup>船なれば 物<sup>もの</sup>を思<sup>おも</sup>うかこがれて行く」

と詠<sup>えい</sup>じたまえば、老人<sup>ろうじん</sup>につことうち笑<sup>わら</sup>い、

「さてさてやさしき旅人<sup>りょじん</sup>かな。『まことにしず山がつの心<sup>こころ</sup>をも

やわらぐ歌<sup>うた</sup>なり』と、古人<sup>こじん</sup>のほめしもここなるぞや。柴積<sup>しばつ</sup>みて

せまくとも、とくとくめされそうらえ」

と、やがて船<sup>ふね</sup>をぞよせにける。淡海<sup>たんかい</sup>大悦<sup>たいえつ</sup>限りなく、急ぎ<sup>いそ</sup>舟<sup>ふね</sup>にう

ち乗り<sup>のり</sup>たまひ、こがれ出<sup>い</sup>づる室<sup>むろ</sup>の戸<sup>と</sup>を、うち出<sup>い</sup>で見<sup>み</sup>れば滄海<sup>そうかい</sup>の、

波<sup>なみ</sup>より月<sup>つき</sup>の出<sup>い</sup>ずるにぞ、三笠<sup>みかさ</sup>の山<sup>やま</sup>に出<sup>い</sup>でし月<sup>つき</sup>かもと、心細<sup>こころほそ</sup>さは

旅行<sup>りょこう</sup>の暮<sup>く</sup>れ。かかるおりにぞ世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>のものあわれも知<sup>し</sup>らるれ

ど、思<sup>おも</sup>いなぐさみたまいつつ、

「いかに老人<sup>ろうじん</sup>、おことは室<sup>むろ</sup>の津<sup>つ</sup>の人か」

老人<sup>ろうじん</sup>聞<sup>き</sup>きて、

「いや、それがしは讃洲<sup>さんしゅう</sup>天野<sup>あまの</sup>の郷<sup>さと</sup>のものにてそうろう」

淡海<sup>たんかい</sup>聞<sup>き</sup>こしめし、

「何<sup>なん</sup>とこのごろ唐土<sup>もろこし</sup>より万戸<sup>まんこ</sup>というもの、三つ<sup>み</sup>の宝<sup>たから</sup>を持<sup>も</sup>ち日本<sup>ひのもと</sup>

「待て待て」

と招きよせ、歌を読みかけました。

室積や塩木を運ぶ船なれば物を思<sup>おも</sup>うかこがれても行く

老人はにつこりと笑<sup>わら</sup>い、

「さてさて、風流な旅人<sup>りょじん</sup>でございますな。『しず山がつの心をやわらぐるは歌なり』と、古人<sup>こじん</sup>も言<sup>い</sup>いましたが、まことでございますなあ。

柴を積んでいてせまくはありますが、それでよろしければはやくお乗りください」

と、船をよせてくれました。淡海公は喜び、すぐに舟に乗りました。

室の戸を出て見ると海の波から月が出るのが見え、「三笠の山に出でし月かも」と詠んだ古人の旅先での心細さが身に染みてきます。

こういうときにこそ世の中のものあわれも知られるもののだと思いつつ、

「御老人、あなたは室の津の人ですか」

と聞きますと老人は、

「いや、私は讃洲天野の郷のものでございませ」

に渡るとて、この浦にて玉を竜女に取られしとはいかに」

老人聞きて、

「まことに去んぬる七月のころ、この沖にてさようのことのそ  
うろうとて、そのころ二三日は日和荒く船の通いもなくそうろ  
う」

と申す。

ときに淡海、

「何とその玉を取られしこと、万戸が不覚と言いながら、かつ  
は日本にても本意なきことなり。なにとぞこの玉取り返すべき  
はかりごとはあるまじきにや」

とおおせける。老人聞きて、

「そも竜宮へ取り行きたらんもの、何としてかは取り返し申さ  
れまじ。さりながら竜神も三熱の苦しき深きゆえ、つねになげ  
き沈みそうろう。ことに今上の難は仏法の威力ならではまぬが  
れがたきゆえ、仏事結縁を好みそうろう。もしこの浦にて大法会  
を行い、稚児の舞を始めそうらわば、竜神感応して結縁のため  
大竜小竜残らず浮かみ出で、音楽を聴聞いたすべし。そのひ

① 竜や蛇が受ける三つの苦しみ。熱風・熱沙に  
焼かれる・暴風で衣服がはぎとられる・金翅  
(こんじ) 鳥の餌としてたべられる、の三苦。  
前出。

② この世に生きている間。

③ 仏道にはいること。

と答えました。淡海公はそれを聞き、

「讃岐といえは、このごろ唐土より万戸將軍  
というものが三つの宝を持って日本に渡って  
きて、この浦で龍女に玉を取られたというが、  
本当か」

と聞きますと、老人は、

「はい。この七月のころ、この沖でそういう  
ことがあったといえます。それで、そのあと  
二三日は天候が悪く、船が通わなかったそう  
です」

と返事しました。

そこで、淡海公が聞きました。

「その玉を取られたのは、万戸の責任ではあ  
るのだが、日本の国にとつても面目のないこ  
とじゃ。なんとかこの玉を取り返す方法はな  
いものであろうか」

老人はこの言葉を聞いて、

「龍宮に取られた以上、なかなか取り返すの  
はむずかしいでしょう。しかし、龍神も三熱  
の苦しみに悩まされており、いつも困ってお  
りますから、仏と結縁することを好んでおり  
ます。ですから、この浦で大法会を行い、稚  
児の舞を始めたならば、龍神が感応し、結縁  
のため大竜小竜残らず浮かび出てきて、音楽  
を聴聞するはずですよ。」

① 水中にもぐること。

まに潜きする海女人のよくものに馴れたるを頼み、潜き入らせ  
て奪い取れば、もし取りえることもそうらわん」  
と申すときに淡海、

「その海女人はいずれの所に住むものなるぞ」

老人聞きて、

「さんそうろう。むこうに見えそうろう天野の里こそ海女人の  
住み家にてそうろう」

淡海聞こしめし、

- ② あなた。  
③ うまくやりとげたら。  
④ 主君が、功績をたたえて金品などを与えるこ  
と。

「何と、御分もし知る人もあらば、しかるべき海女人を頼みて  
たべ。このこと叶いしおおせなば、貴殿にもその海女人にも  
篤く恩賞行うべし」

とありければ、老人からからとうち笑い、

- ⑤ 領有する土地。  
⑥ 夫婦となること。

「ああ、こはおろかなる旅人かな。人の所領を望むは命あつて  
のこと。かく竜宮に入りて玉を取らんこと、千に一つもかない  
がたし。しそんずるほどならば、竜魚のえ食とならんもの、  
誰が頼まれ申すべき。されども、また海女乙女のこころざしも  
切に情の深からんをはからい、妹背の語らいをなし、子なども

その間に海女で海に潜るのが上手な者に命じ  
て奪い取れば、うまくいくかもしれませぬ」  
と言いました。淡海公が、

「そういう海女人はどこに住んでいるであら  
うか」

と聞きますと、老人は、

「はい。むこうに見える天野の里が海女人の  
たくさん住むところでございます」  
と返事しました。

淡海公はさらに、

「なるほど。ではそなたの知りあいにかかる  
べき海女人がいたら、頼んでもらえぬかのう  
これがうまくいったなら、貴殿にもその海女  
人にもたくさん恩賞をさしあげるが」  
と言いますと、老人はからからと笑い、

「ああ、おろかなことをおっしゃいますなあ。  
人が所領を望むのは命があるからのこと。そ  
うやって龍宮に入って玉を取るなどというこ  
とは、千に一つもうまくいくはずがありません。  
仕損じたならば、龍魚の餌食になるでし  
ょうに、誰がそんな頼みを受けるものですか。  
しかし、情の深い海女と夫婦になり、

①わけ。

②決して……するな。

うけてのち、只ひたすらに頼みなば、わが子を世に立てんとて命を捨つることもやそうらわん。やあ、よしなき長物語り。船が着いてそうろう。とくとくお上がりそうらえ」

そのとき淡海はやがて船より上がりつつ、老人に向かい、「さてさて、ただ今の物語り、少しようすありて語りそうろう。かまえて人にもらしたもうな」

とおおせける。そのとき老人、

「おろかなる淡海。三笠山にて見えしこと、はやくも忘れけるかな。われはこれ春日大明神なり。いよいよゆくすえ守らんと、たちまち仏体と現れ、吹き来る風にうち乗り、行き方知らずになりける。

淡海奇異の思いをなし、御あと三度礼しつつ、神の教えにまかせつつ、天野の里へと急がる。里にもなれば、げに海女人の住み家と見え、草ひき結ぶむぐら家のここやかしこに見えけるぞや。目なれぬひなの旅の空、心なぐさむわざなりと、しばしたたずみたまいける。

かかるところへ、さも尋常なる海女乙女、月の出潮をくみえ

③「むぐら」は荒地に生える雑草。むぐらの生い茂った中に建つそまつな家。

④都から遠いなか。

⑤普通でないこと。立派なこと。「尋常でない」の意。

⑥月の出にともない潮が満ちてくること。

子供を儲けたあとで、よくよく頼んだならば、わが子を世に出そうとして命を捨てる覚悟をすることもあるかもしれないがな。やあ、長話をしているうちに船が着きましてございます。さあ、はやく舟を下りなされ。」

淡海公は舟をおりながら、老人に、「今の話、少しわけがありますので、他の人には話さぬように願います」

と頼みました。と、この老人は、たちまち仏体に変じて、

「おろかなことを。淡海。三笠山でのこと、もう忘れたのか。わしは春日大明神であるぞ。これからもそなたを見守っておるからな」と言つて、また吹いて来る風に乗ってどこかに行つてしまいました。

淡海公は不思議に思いつつ、姿を消したあとにむかつて三度お礼しながら、神の教えのとおり、天野の里にやってきました。

その里はたしかに海女人の住む里らしく小屋のような住まいがあちこちに見えます。田舎らしいひなびた風景に心がなぐさめられる思いでしばらくながめていました。

①潮水をくんだ桶をのせて運ぶ車。  
②たよりとする夫がいない。

③このうえなくすばらしい。

つつ、潮くみ車よるべなき、身は海女人の袖ともに、しおれて  
帰るありさまは、げにもえならぬ風情かな。淡海このよしご覽  
じて、

「このうのう、御身はこの家のあるじにてましますか」

海女人うけたまわり、

「さんぞうろう。みずからが塩屋にてそうろう」

淡海聞こしめし、

「これは旅に疲れしものにてそうろう。一夜の宿を貸したまえ」  
とぞおおせける。海女人聞こしめし、

「おおせもつとも、おいたわしくそうらえども、見申せば都人  
と見えさせたもう。かようなるしずが屋には、なかなか御宿ま  
いらせがとうそうろう。今少し御出でそうらえば、人里多くご  
ざそうろう。それにて御宿めされそうらえ」

と申す。そのとき淡海、

「うたての人のおおせかな。のうあれご覽ぜよ。月さえも影を  
細めて草露に宿らせたもうならいなり。いわんやわれは旅人の、  
一夜仮り寝のこの宿に、御身の心あるならば、むぐらの宿に寝

⑦つれない。ひどい。

⑤お気の毒に。

⑥身分のいやしい者の家。

④塩を焼くための家。自分の家を卑下して言っ  
たもの。

そこに、海女の乙女が月の出に潮をくみな  
がら、その境涯を嘆きつつ悲しそうに帰って  
いくありさまはえもいえない風情です。淡海  
公は、この女に声をかけました。

「あなたはこの家のあるじですか」

「はい、私の住まいです」

「旅に疲れたものです。一夜の宿を貸してい  
ただけませんか」

「お気の毒なことですね。でも、お見かけし  
たところ都の方のようですね。こんなきたな  
い所には、なかなかお泊まりにはなれないと  
思います。もう少し行けば人里がたくさんあ  
りますから、そこで宿を借りてはいかがでし  
ょうか」

「つれないことをおっしゃる。ご覽なさい。  
月でさえ影を細くして草の露の上に宿ってい  
るではありませんか。まして私は旅人の身、  
一夜限りの宿でございます。お心があるなら  
ばどんな宿にでも泊まります。ぜひ今晚だけ  
でも泊めてくださいませ。おねがいしま  
す」

- ①小屋をおおっているもの。  
 ②網目の十すじある菅でできたこも。  
 ③しきもの。「ひじき（＝海藻の一種）」とかける。そまつであることをあらわす。  
 ④「みる」と「わかめ」ともに海藻の一種。  
 ⑤住んでていやになる。  
 ⑥気の毒さ。

⑦夫婦としてわけへだてない関係。

⑧藤原氏一族をさす。  
 ⑨夫婦となること。

もしなん。かりの宿りをおしみたもうな。一夜を明かさせたびたまえ」

と、ひたすらおおせありければ、海女人うけたまわり、

「いや、お宿をおしみ申すにあらず。これご覧ぜよ。しずが屋は竹の柱に草のとま、十布のすがこもたれこめて、引敷物にはみるわかめ。なれにし海女のこの身さえ、住みわびたりしこの宿に、泊めまいらせんもいたわしさに、さてこそかように申すなり。まこと、さように思しめさば、こなたへ来ませ旅人と、御手をとりてもろともに塩屋の内へ入りたもう。かりそめながらこれよりも妹背わりなき縁となり、千代に八千代の末までも、藤咲く門の繁昌は、この契りぞはじめなる。めでたしともなかなか申すばかりはなかりけり。

「いや、お宿を貸したくないから言うのではありません。どうぞご覧ください。この貸しい住まいは、竹の柱に草の屋根、十布のすがこもを垂らし、敷物はみるわかめです。慣れている私自身でさえ、いとわしく思うこの家にあなた様をお泊めするのはおいたわしいことだと思つて言うのです。でも、それでよろしいと言うのでしたら、どうぞこちらへいらしてください。」

と、手をとり、いっしょに海女の家の中に入つていきました。

こうして、ふとした縁ながら、これより二人は夫婦の縁を結び、末々までも栄えることになるわけで、それを思うと、二人の契りのはじめは、なんともめでたい限りではありません。

## 大職冠 第四段

① 面向不背の玉。

② 身分の低い者（ここでは海女）の家。  
③ ほんの少しばかり。

④ 十分にのびていないためにほつれた髪。

⑤ 天皇。

⑥ 「むぐら」は荒地に生える雑草。むぐらにおおわれた家。

⑦ 訪問する。

⑧ 荒波の押し寄せる磯。「有り」とかける。  
⑨ 「無み（＝ないの）」にかける。

⑩ 「沖」と「起き居」をかける。

⑪ 不吉なことである。

かくてそののち、内大臣淡海公、明珠を取らんばかりごとに、思わず海女のしずが屋に、一夜仮り寝の夢枕、かことばかりの御情、月に重なり日にそいて、三年になれば今ははや、若君一人おわします。御名を藤若丸と申して二才にならせたもうゆえ、父母の寵愛浅からず、うき身を慰さむわざとなり、明かし暮らさせたまいける。あるとき淡海若君を膝の上におきまいらせ、おくれの髪をかきなでて、

「ああ、さてもかわいいのこの若や。それがし都にありしとき、かかる男子をもうけなば、上一人の君をはじめ下百官にいたるまで、喜びの色をそえ、さまざま寵愛あるべきに、むぐらの宿の旅寝の床、父母ならでたれ人が、こととうものも荒磯の波のおきいに起きふして、育つことこそふびんや」

と、涙に暮れておわします。海女乙女見まいらせ、

「ああ、いまいまし、都人。生い先長きこの若を見ては涙を流

内大臣淡海公は、面向不背の珠を取りかえすために、海女の庵に宿をとったのがきつかけで、二人は夫婦の契りを結ぶことになり、やがて三年になりました。しかも、二人の間には若君が一人生まれています。名は藤若丸、二才になります。父母はともにかわいがって日々を過ごしておりました。

あるとき淡海公は若君を膝の上において、髪をなでながら、

「かわいい子じやなあ。ただ、都にいるときにこんな男の子が生まれていたら、帝から下々の者までたくさんの人にお祝いを言われ、かわいがられていたであろうに。こんな貧しい住まいで、しかも旅先でできた子、こんなところで育つのもかわいそうなことよ」と、涙を流していました。海女乙女はそれを見て、

「なんと不吉なことを。まだ先の長いこの子を見て涙を流すとはどういうことですか。もともとあなたは都の人、

① 納得できなく。

② おもいがけなく。  
③ 似つかわしくない。ふさわしくない。  
④ 身分の低い者。海人が自分をさして言う。

⑤ 将来を期待する。

⑥ 『伊勢物語』の「言えばえに言わねば胸にさわがれて心ひとつになくころかな」「三四段」を踏まえる。なんとも言いようがなく、心が痛む。

⑦ 非常に。

⑧ わけもなく。  
⑨ 何をかくそうか。

⑩ とびさがり。

⑪ わけ。

⑫ 約束の言葉。

したもうぞ、心得①がたくそうろうぞや。もとより御身おんみは都人みやこびと、不慮ふりよにこの屋やに宿やどを借り、にげなきし④ずに縁えんをかね、年月としつき重ねたまえども、今はわれわれ親子おやこを捨て、故郷こきょうに帰りたまわんと御心おんこころにておわすらん。さ思おもいてこそ初はじめよりさまざま辞退じたい申もうせしを、『神かみかけて変わらじ』との御言おんことの葉はの重おもければ、身のほど知らぬ妹背いもせの縁えん、かねぬることこそ口くちおしや」とうらみかこちて泣なきたもう。淡海たんかい聞きこし召めし、「言いえばえに、言いわねば胸むねにさわがるとは、かかるおりをや詠えいじけん。もとより誓ちかいし言ことの葉はの何なにしに変わかり申もうすべき。この若わかを見るにつけ、それがし都みやこにあるならば、御身おんみもろとも栄華えいがにあらせまいらせんに、かかるわびしきうき住すまい、よにいとおしく思おもうゆえ、そぞろに涙なみだをもらせしなり。今は何なにをかつつむべき。われこそ大職冠たいしよかん鎌足かまたり公こうの嫡男ちやくなん、内大臣ないだいじん淡海たんかいとはわがことなり。人ひとにもらさせたもうな」と名なのらせたまえば、海女あま乙女おとめ驚おどろきとびしさり、「さればこそはじめよりある人ひとと見えつるが、さてはさようでましますかや。かかる貴人きじんと知らずして、この年月としつきのかね

ふとしたことでここに宿を借りたのが縁で夫婦になり、年月を重ねてきましたが、もうわれわれ親子を捨てて、都に帰ろうというのでしよう。そういうことがあるかと思ひ、最初は断わったのでしたのに、『神にかけても変わらぬ』と約束してくださったので、それを信じて夫婦になったのです。それなのに」とうらんで泣きました。淡海公は、「言えばえに言わねば胸にさわがるといふ歌はこういう気持ちで詠んだものであろう。私の誓いの言葉にうそいつわりがあるはずはないが、この子を見るにつけ、自分が都にいたならば、そなたとともに、もう少し豊かな暮らしができたろうにと思ひ、いまの貧しい住まいを不憫に思ひがゆえに涙を流したのじゃ。今はもう、包み隠さずに語ることにしよう。この私は、実は、大職冠鎌足公の嫡男内大臣淡海なのじゃ。が、このことを人にもらしてはならぬぞ」

海女乙女は驚いて飛びのき、「なるほど。最初からなにかわけのある方と思つていましたが、そういうことでございませうか。そんな貴い方とも知らずに、この年月、将来のことをあれこれ約束したりしましてさぞ困られたことでしょう。」

- ①不都合。あつてはならないことである。  
 ②世も末となり、仏法の衰えた世の中。  
 ③道義や正義がまだすたれていない。  
 ④夫。

⑤仏教で、仏・法・僧の三つの宝。また、仏のこと。

⑥恥じ入ること。

ごとはさこそびんのう思し召さん。世は末世におよぶとも日月  
 いまだ地に落ちたまわす。かかる高位の御方をわが背子と思  
 なれしこと、さぞや仏神三宝も憎しと思しめさるらん」  
 と、慙愧の心に耐えかね、大臣の刀を引き奪い、すでに自害と  
 見なければ、淡海あわててすがりつき、  
 「こはものに狂いたもうか」

海女人聞いて、

「おお、ことによりものにも狂い申すべし。ここをはなさせた  
 まえや」

と、もだえ恋がれてなげかる。そのとき淡海、

「おお、もつとも。さりながら、心をしずめて聞きたまえ。そ  
 れがしかように身をやつし、君の御ため国のため、深き望みの  
 あるゆえに、この所に迷い来たれども、不慮に御身になれまい  
 らせ、この若ももうけしゆえ、思わず月日を重ねしなり。まこ  
 とさように思しめさば、とても死なんず命にて、それがしが望  
 みをかなえたびてんや」  
 と涙ながらにのたまえば、海女人聞き、

⑦みすほらしく姿を変えて。

末世の世とはいえ、日月はまだ私を見放した  
 わけではなかったのですね。こんな立派な方  
 を夫と思っていたなんて、さぞ仏神三宝も私  
 のことを憎いと思つていて、大臣の刀を奪い  
 と、慙愧の念に耐えかねて、大臣の刀を奪い  
 自害しようとなりました。淡海公はあわててす  
 がりつき、

「そなたは狂つたのか」

と止めましたが、

「こと次第によつては狂いもしましょう。

その手をはなしてください」

と、もだえこがれて嘆いています。

そのとき淡海公が涙ながらに言いました。

「なげくのはもつとも。だが、よく心をしず  
 めて聞いてくれ。私がこのように身をやつし  
 てこの地に来たのは、君のため国のために深  
 い望みがあつたこと。が、ふとした縁でそ  
 なたと夫婦になり、この子ももうけたがため  
 に思わず月日を重ねてしまったのじゃ。本当  
 に死のうと思つているなら、その命を私の望  
 みのために使つてはくれぬか」

①『千載集』の「難波江の芦のかり寝のひとよゆえ身をつくしてや恋いわたるべき(皇嘉門院別当)」を踏まえる。夫婦の約束をした。

②非常にもつともである。

③父に似ず愚かであること。謙遜して用いることが多い。  
④藤原氏の祖先神。  
⑤子孫。

⑥不名誉。

⑦日本。  
⑧国土の神。

⑨春日神社に祭られている藤原氏の氏神。

⑩确实。

⑪海中にもぐって入り。

⑫天子に申上げること。  
⑬家督を継ぐ子。

「こは今めかしき都人、芦のかり寝の一節の契りをかねしときよりも、命は君にまいらせんと思ひこうだることなれば、かかるいやしきしらずにても、その志は変わらじ」と、またこそ消え入りなげかるる。

ときに淡海、

「おお、げにもつともしごくなり。さあらば語り申さんと。心をしずめて聞きたまえ。わが身不肖なれども、天津児屋根の御ゆずりとして、朝廷補佐の近臣なり。一年万戸といひしもの、面向不背の玉という明珠をこの浦にて竜女に取られしこと、日本の名折りと思ひ、その玉を取り返さん、そのためにこの所にならずね来たつたり。もとより和国の天神地祇、あわれと思ひめされしゆえ、室津より船に乗りしとき、春日大明神、老人と現じたまい、この玉を取り返さんずるはかりごと細々と教えたまいしなり。御身心をくだきなば、取りえんことは治定なり。たとへこの玉取りそうらわずとも、御身一度竜宮までかずき入りてたずねたまわば、帝へ奏聞申しつこの藤若をわが家の惣領に立つべし。いかにいかに」

「あなたと一夜の契りをかわしたとき以来、この命はあなたのものと思っております。こんな貧しい海女でもその誓いは変わることがございません」

「おお、そうであるなら、その望みを語ることにしよう。落ち着いて聞いてくれ。わが家は天津児屋根命の末裔で、代々朝廷をあずかっていた家柄じゃ。先年、万戸將軍というものがこの浦で龍女に面向不背の玉という明珠を取られたのだが、それは日本にとつても不名誉なことと思ひ、その玉を取り返そうと思つてここにやってきたのじゃ。私の願いをこの国の神々があわれんでくれ、室津から船に乗ったときに、春日大明神が老人の姿であらわれ、この玉を取り返すための方法を細々と教えてくださったのじゃ。だから、そなたが力を尽くしてくれば、玉は必ず取り返すことができよう。たとえ玉を取ることができずとも、一度でよい、そなたが龍宮までたずねて行ってきてくれたなら、その次第を帝へ奏聞して、この藤若は、必ずわが家の嫡男として世に出るようになる。いかがであろう」

①わけ。

とおおせける。  
海女人、よしをうけたまわり、

②天皇。  
③そのうえさらに。  
④なみなみでない。非常な。

⑤方法。

「御身のおおせとあるならば露の命はおしからじ。いわんやわが大君の御ために命を捨てまいらせ、あまつさえこの若を藤原氏の総領となさせたまわんこと、一方ならん喜びなり。御心安く思しめせ。なにとぞ手立てをめぐらし、この玉を奪い返しまいらせん」

⑥雅楽を伴奏とする舞。

⑦気の毒なことに。

⑧やむをえない。のつびきならない。

⑨藤原一門。

と、よに頼もしく申さるれば、淡海大悦かぎりなく、都へ使いを立てたまい、舞楽の用意をなされける。

いたわしや、海女人は藤若殿を抱きつつ、

「さてもぜひなき次第かな。御身を世に立て申さんため、母は

命を捨つるぞや。わ君大臣の子と生まれ、恵みひらけし藤の門、

栄えたまわん御身なり。されども母はしずの女のいやしき海女

の胎内に宿らせたもう御ことを、成人ののち殿上にて諸卿にま

じわりたまわんとき、さこそ無念に思しめさん。よしそれとて

も過去の縁、結びしわれも、いまさらに御身にわかれまいらす

るは、いかばかりと思すらん。合わぬ雲の上人に縁をかね申

⑩宮中。  
⑪大臣より下の貴族。大臣は「公」。

⑫残念。  
⑬もしそうだとしても。  
⑭宮中の人。淡海をさす。  
⑮夫婦の約束をして。

「あなたのお願いでしたら、この命、惜しいとは思いません。喜んでささげます。まして、この子を藤原氏の嫡男にしてくださいという、これは願ってもないことです。ご安心ください。なんとかして、方法を考え、この玉を奪って来ます」

このように、頼もしく約束してくれましたので、淡海公は喜び、すぐに都へ使いを出して、舞楽の準備をはじめたのでした。

さて、この海女は息子の藤若を抱きながら、「ああ、かわいそうに。そなたを世に出すために、この母は命を捨てることになりました。そなたは大臣の子に生まれ、藤原一門の子としての栄華を受ける身。が、この母はいやし海女、その胎内に宿ったそなたは、成人ののち殿上の貴族たちとまじわるときには、さぞ、この母のことを無念に思うことでしょう。が、それも前世からの因縁、そういう縁に結ばれた私がいまそなたと別れることがどんなにつらいか。この身にふさわしからぬ都の貴族と縁を結んだがためにこんな悲しい思いをしなければならぬのです」

① 涙を流してひどく悲しむ。

② 原文「いはけなき(＝幼じ)。東口の口演に従い「いたいけなき(＝無邪気な)」とする。

③ 判断できず。

④ 乳母に同じ。

せしゆえ、今の思いはあるぞかし」

と、額に額をおしあてて、流涕こがれて泣きたもう。

「あら愚かなり、わが心。それ人間の盛衰、これみな夢の夢なれば、なげくべきにはあらねども、まだいたいけなきこの若の乳房の母に離れなば、いかなるゆえともわきまえず、さぞやなげかんふびんさよ。お乳や乳母になれそうとも、まことの母にそうたるにははるかに劣り申すべし。なにかにつけて行く末を、思えば思えば悲しや」

と、またこそ消え入りたまいける。

いたわしや、藤若は善きも悪しきも知ろしめさず。母上常は潮をくみ、みるわかめをかりなどし、いとなむわざにひまなくで、夜のふすまの上ならでは抱きたもうこともなきに、今日<sup>⑤</sup>はひめもす泣き暮らし、おそばを離れたまわねば嬉しきことに思しめし、ほやりほやりとうち笑い、喜びたもう御ありさま。

母上見るに、肝消えて、

「何と語りて聞き知らせ、この思いを知らせん」

と、もだえこがれてなげかるる、理せめてぞあわれなる。

と、額に額をおしあてて、涙を流すのでした。「それにしても、愚かなこと。人の一生はしよせん夢のようなものだから、なげいてはならぬ、とは思うものの、まだ幼いこの子が母と離れ、そのわけも知らずにいれば、どんなにか嘆き悲しむことでしょう。いくら乳母がいようとも、やはり実の母とは大違い、この子の将来を思うとやはり悲しくなります」と、消え入るように泣くのでした。が、藤若はそんなことは知らず、いつもは潮をくみ海藻を採って日々の仕事に忙がしく、夜にならないうち抱いてくれない母親が、今日は一日中泣きながらそばを離れないので、うれしく思い、にこにこ笑って喜んでいただけです。「どう言ったら母のこの思いを知らせることができらう」となげいている母の様子はまことにあわれでありました。

①香川県木田郡牟礼町の地名。

②からげ組み。

③足のすべりや足音の響きをよくするため、舞台一面に敷き詰める床板。

④「一丈」は約三メートル。

⑤小さい旗を上部につけたほこ(槍に似た武器)両方。

⑥雅楽を演奏する人。

⑦多く。

⑧参上してひかえること。

⑨管と絃。雅楽で使用する管楽器は笛・箏・篳篥・簫、絃楽器は琴・琵琶。

⑩仏教で、内院には将来仏となる菩薩が生き、弥勒が住み、外院には天人が住むとされる天。

⑫普通でないこと。立派なこと。「尋常でない」の意。

⑬『古今集』巻頭の「年の内に春は来にけりひととせを去年(こと)とやいわむ今年とやいわん(在原元方)」を踏まえる。年が明けないのにもう立春になり、春になっている。

⑭「秋」に「飽き(あきるほど十分)」をかける。

かくてもあらぬことなれば、若君を抱き上げ、泣く泣く寝所に入りたもう。

さるほどにすでにその日になりしかば、房崎の沖にして大船あまたから組み、敷舞台を張り立て、十丈の旗竿を立て、双に楽屋をかまえ、楽人あまた伺候して、管絃の調子を調べ待ちかけた。

さる間、海底の竜神はこのよそおいを見るよりも、

「さては房崎の浦は極楽浄土か兜率天に変わるか」

と驚き、おのおの浮かみ出でたまい、舞楽を聴聞つかまつり、三熱の苦を忘れ、このところに日を送り、喜びたもうぞことわりなれ。

すでに音楽始まれば、三人の舞い稚児、さも尋常に出で立ち、おのおの舞台に出でたまい、拍子を変えて歌いける。

「げにおもしろや、年の内より春は来にける鶯の、ほうほけきようとさえずりて、のきばの梅に宿しつつ、春をや人に告げつらん。竜の三熱深くとも、かかる調べを聞くからに、苦しき尽きて楽しみの秋とやならん。おもしろや」

しかし、いつまでもそうもしておれず、若君を抱いて泣きながら寝所に入っていきました。

さて、いよいよ舞楽の日になりました。

房崎の沖に大船をたくさん並べ、敷舞台を作り、楽屋をかまえ、楽人もたくさんやってきて音を合わせながら待っていました。

海底の龍神はこの様子を見て、

「房崎の浦が極楽浄土か兜率天に変わったのか」

と驚いて、みな海底から浮かび出てきて、舞楽を聞き、三熱の苦を忘れて喜んでいました。音楽が始まると、三人の舞い稚児がみごとに姿で舞台に出てきて、拍子を変えて歌いました。

「おもしろいこと、年のうちに春が来たのか、鶯はほうほけきようとさえずり、軒端の梅に宿り、春を告げている。龍神が三熱に苦しんでいても、この素晴らしい調べを聞けば、苦しきは消えて、楽しみとなるだろう。おもしろいこと」

①一心に。

と、しばし奏<sup>かな</sup>でて舞<sup>ま</sup>いければ、竜神<sup>りゅうじん</sup>感<sup>かん</sup>にたえかね、余念<sup>よねん</sup>無<sup>な</sup>うしてながめける。そのとき淡海<sup>たんかい</sup>海女<sup>あまびと</sup>人<sup>ひと</sup>に向<sup>む</sup>かい、

②さては。

「すわや、合<sup>あ</sup>い図<sup>ず</sup>の時<sup>じ</sup>節<sup>せつ</sup>ぞ」

③非常に長いこと。「尋」は長さの単位で、一・五メートルまたは一・八メートル。

とすすめたまえば、海女<sup>あまびと</sup>人<sup>ひと</sup>もかねて用意<sup>ようい</sup>のことなれば、千尋<sup>ちひろ</sup>の繩<sup>なわ</sup>を腰<sup>こし</sup>につけ、小船<sup>しょうせん</sup>にとり乗<sup>の</sup>って、海<sup>うみ</sup>のおもてにこぎ出<sup>い</sup>だす。

④船頭。

ときに海女<sup>あまびと</sup>人<sup>ひと</sup>楫<sup>か</sup>取<sup>とり</sup>に向<sup>む</sup>かい、

「もし玉<sup>たま</sup>を取<sup>と</sup>り得<sup>え</sup>なばこの繩<sup>なわ</sup>を動<sup>うご</sup>かさずべし。そのとき人<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>力<sup>ちから</sup>を

そえ、引<sup>ひ</sup>き上<sup>あ</sup>げたまえ」

⑤よく切れる剣。

と約束<sup>やくそく</sup>し、一<sup>ひと</sup>つの利<sup>り</sup>剣<sup>けん</sup>を抜<sup>ぬ</sup>き持<sup>も</sup>って、か<sup>か</sup>の海<sup>かいてい</sup>底<sup>てい</sup>に飛<sup>と</sup>び入<sup>い</sup>りたま

⑥両脇。

えば、双<sup>そう</sup>へばつとぞ退<sup>の</sup>いたりけり。そのひまに宝<sup>ほう</sup>珠<sup>じゆ</sup>を取<sup>と</sup>って

逃<sup>に</sup>げんとする。

守<sup>しゆご</sup>護<sup>ご</sup>の竜<sup>りゅう</sup>神<sup>しん</sup>、

「逃<sup>の</sup>がさじ」

と、たちまち大<sup>だい</sup>蛇<sup>じや</sup>と現<sup>あら</sup>われ、海<sup>あま</sup>女<sup>ま</sup>をめがけておいつめしはすさ

まじかりける次<sup>しだい</sup>第<sup>だい</sup>なり。

今<sup>いま</sup>ははやすでに危<sup>あや</sup>うく見<sup>み</sup>えしかば、海<sup>あま</sup>女<sup>ま</sup>人<sup>ひと</sup>力<sup>ちから</sup>およばず、持<sup>も</sup>

ちたる剣<sup>けん</sup>を取<sup>と</sup>りなおし、乳<sup>ちち</sup>の下<sup>した</sup>をかき切<sup>き</sup>り、玉<sup>たま</sup>を推<sup>お</sup>し込<sup>こ</sup>め、剣<sup>けん</sup>

と、奏<sup>かな</sup>でつつ舞<sup>ま</sup>いますと、龍<sup>りゅう</sup>神<sup>しん</sup>は感<sup>かん</sup>心<sup>しん</sup>して、熱<sup>ねつ</sup>心<sup>しん</sup>に見<sup>み</sup>ています。そのとき淡<sup>たん</sup>海<sup>かい</sup>公<sup>こう</sup>は海<sup>あま</sup>女<sup>ま</sup>人<sup>ひと</sup>に向<sup>む</sup>かい、

「さては、合<sup>あ</sup>い図<sup>ず</sup>の時<sup>じ</sup>だぞ」

とすすめたので、海<sup>あま</sup>女<sup>ま</sup>もかねて用意<sup>ようい</sup>のとおり、千<sup>ち</sup>尋<sup>ひろ</sup>の繩<sup>なわ</sup>を腰<sup>こし</sup>につけ、小<sup>しょう</sup>船<sup>せん</sup>に乗<sup>の</sup>って、海<sup>うみ</sup>にこぎ出<sup>い</sup>しました。海<sup>あま</sup>女<sup>ま</sup>は楫<sup>か</sup>取<sup>とり</sup>に向<sup>む</sup>かって、「首<sup>くび</sup>尾<sup>び</sup>よく玉<sup>たま</sup>を取<sup>と</sup>ることができたら、この繩<sup>なわ</sup>を動<sup>うご</sup>かしますから、そのときみんなで力<sup>ちから</sup>を入<sup>い</sup>れて引<sup>ひ</sup>き上<sup>あ</sup>げてください」

と約束<sup>やくそく</sup>し、鋭<sup>えい</sup>い刃<sup>や</sup>の剣<sup>けん</sup>を持<sup>も</sup>って、海<sup>かいてい</sup>底<sup>てい</sup>に飛<sup>と</sup>び入<sup>い</sup>りました。すると魚<sup>いさな</sup>はみな脇<sup>わき</sup>に退<sup>ひ</sup>きました。その間に宝<sup>ほう</sup>珠<sup>じゆ</sup>を取<sup>と</sup>って逃<sup>に</sup>げようとしました。すると、守<sup>しゆご</sup>っていた龍<sup>りゅう</sup>神<sup>しん</sup>が逃<sup>に</sup>がすまいと大<sup>だい</sup>蛇<sup>じや</sup>になつて海<sup>あま</sup>女<sup>ま</sup>をめがけて追<sup>お</sup>いかけてきました。なんとも恐<sup>おそ</sup>ろしいことです。いよいよつかまりそうになったとき、海<sup>あま</sup>女<sup>ま</sup>は持<sup>も</sup>っていた剣<sup>けん</sup>で乳<sup>ちち</sup>の下<sup>した</sup>をかき切<sup>き</sup>り、そこに玉<sup>たま</sup>を推<sup>お</sup>し込<sup>こ</sup>め、剣<sup>けん</sup>を捨<sup>す</sup>てて伏<sup>ふ</sup>していました。

を捨ててぞ伏したりける。竜宮のならいに死人を忌めば、竜神はとつてかえし、波の底へ沈みければ、あたりに近づく悪竜なし。

約束の縄を動かせば、人々喜び力をそえ、手に手に縄をぞたぐりける。

玉は知らず、海女人は海上に浮かみ出でにける。人々喜び立ち寄りて、海女人を船館に抱き上げ見たまえば、悪竜のわざと見え、五体も続かずなりにけり。大臣このよし御覧じて、

①死んでしまった。

「珠は取り得ず、あまつさえ主は空しくなりけるか」

と、そのまま死がいに取りついて、涙にむせばせたまいける。そのとき、海女人息の下よりも、

「わが乳のあたりをご覧ぜよ」

とある。げにも剣の当たりしあとあり、その中より光明輝き出でたりける。人人驚き、傷の口を開かんとしければ、いたわしや、海女人は苦しげなる声を上げ、

「おお、しばらく待たせたもうべし。この傷を開きなば、そのまま息絶え申すべし。輪廻深きことながら、今一度藤若をひと

②執着心の深いこと。

龍宮では死人を忌む風習がありますので、龍神は波の底にもどっていき、海女のあたりに近づくものはありませんでした。

そこで、約束どおり縄を引きましたので、陸の人々は喜んで力を入れて縄をたぐりあげました。

海上に浮かびあがってきた海女を、人々は船に引き上げましたが、悪龍にやられたとみえて傷だらけで、気を失っています。大臣はこの様子を見て、

「珠をとりかえすことはできなかったのか。

そのうえ、命も奪われてしまつて」

と死骸に取りついて涙を流しました。そのとき、海女が苦しい息の下から、

「私の乳のあたりを見せてください」

と言いました。そこには剣のあたったあとがあり、その中から光り輝くものが見えています。人々は驚き、傷口を開こうとしましたが、海女は苦しげな声を上げて、

「しばらく待ってください。この傷を開いたら、私の息も絶えてしまいます。」

①連れてきて。

②死者の魂が迷い行くところ。

③冥途。

④「五障の罪」ばかりでなく、自害し、または竜に喰い殺されて、自分は地獄におちることであろう。そうすると、死後の住む場所が違うので二度と会えないことになる。

⑤『法華経』提婆達多品に、女人は梵天王・帝釈天・魔王・輪廻聖王・仏身になれないとある。

⑥聞くことには、「奈落」を言い出す語ともなっている。

⑦地獄。

⑧仏の本体を五官（目・鼻・耳・舌・皮膚）で捉えられる形にあらわすこと。

⑨わが身の上よりも＝原文「わが身の上若も」。

目見せてたびたまえ」

と、涙とともにぞ申さるる。

人人聞きたまい、

「それこそ易き御こと」

と、藤若殿をいざないて海女人に見せたてまつる。

母はわが子とうちながめ、

「おお、いとおしのこの若や。もはや母は息絶えて、ただ今冥途

におもむくぞや。同じ黄泉路といいながら、わが子のために捨

つる命、いとうべきにはあらねども、今わかれまいらせて、ま

た会うこともかたければ、いとどさええ女は五障の罪の晴れやら

ぬに、われとやいばにかかり、または竜魚に喰らわれて空し

くなりしことなれば、聞くならく、奈落の底にや入りぬべし。

さりながら、かかる仏体色相の玉を日本に取り返し、ふたたび

渡すわれなれば、などか仏神三宝もあわれみたまわざるべきや。

さりながらさりながら、死するわが身の上よりも、ただこの

若の行くすえをまもらせたまえ神ほとけ」

と、わが子の行く末思ふなる親の心ぞあわれなり。いたわしや

せめていまいちど藤若に逢わせてください」  
と、涙ながらに言いました。

「ではすぐに」  
と人々は藤若を呼びに行き、海女に会わせました。

母はわが子をながめながら、

「おお、いとしい子。もう母は息が絶えて、今から冥途に旅立ちます。わが子のためにこうして命を捨てることを厭うわけではありませんが、今わかれるともう会えませんが、こうして呼んでもらいました。大切な仏体色相の玉をこの日本の国に取り戻すために命をささげたのですから、仏神三宝もあわれみ、女に備わっているという五障の罪も晴れることとしましょう。どうか神様、この子の行くすえをまもってください」

と、わが子の行く末を思ふ親の心はまことにあわれなものがあります。

①目の前がまっ暗になること。

②別れ。

③例の。

④塚を作り、遺体を埋め。

⑤供「くよう」に同じ。供養。死者が迷わず成  
仏できるように仏事を行うこと。

⑥奈良にある藤原氏の氏寺。

藤若殿、今わかるるをば知らずして、今朝ほどより母上にわか  
れて会うたるうれしさに、母の乳房に吸いついて、御手にて乳房  
を撫で胸をたたき、喜びたもうを見るにこそ、父大臣を始め  
たてまつり、おそばなりし人々も目くれ心も消え果てて、

「おっお、道理なり、ことわりや」

と皆皆涙を流さるる。

ときに海女人、

「今ははやこれまでなり。いとま申して大臣殿、名残おしの藤  
若や」

と、のたもう声の下よりも、みずから傷の口を開き、くだんの  
玉を取り出だし、そのまま息絶えたまいける。人人死がいに取  
りついて、

「のうこれはこれは」

とばかりにて、前後を忘れてなげかるる。諸事のあわれと聞こ  
えける。

さてもあるべきことならねば、海女人の御死がいを土中につ  
きこめたまいつつ、良きに供養なされける。さてこの玉は興福寺、

かわいそうに、藤若は今が別れであるとも  
知らず、今朝別れた母に会えたうれしきで、  
母の乳房に吸いつき、その手で乳房を撫で胸  
をたたき、喜んでいます。その様子を見て、  
父大臣を始めおそばの人々も、涙を流さない  
人はありませんでした。

やがて海女は、

「もはやこれまででございます。おいとま  
いたします。名残おしいこと、藤若や」

と言いながら、自分の手で傷口を開き、くだ  
んの玉を取り出し、そのまま息が絶えてしま  
いました。人々は死骸に取りついて嘆くしか  
ありませんでした。まことにあわれなことで  
ありました。

さて、そのままにしておくこともできませ  
んの、海女の死骸は土中に埋め、手厚く供  
養をしました。

- ① 寺院で本尊を安置する建物。  
 ② 「釈迦」の尊称。  
 ③ 藤原鎌足のこと。  
 ④ 信仰、または祈禱のために寺院の中央に安置する仏・菩薩。  
 ⑤ 眉と眉のあいだ。  
 ⑥ 彫つてくぼみを作つてそこへ入れ。  
 ⑦ 死ぬ間際のようにす。

① 金堂の② 釈迦文仏、③ 大職冠の造らせたもう御本尊の眉間に④ ⑤ ⑥ ⑦  
 めたもうゆえ、今の世までも伝わりたもう。  
 かの海女人の最期の体、また大臣親子の御ありさま、いずれ  
 もいずれも世の中のものあわれはこれなると、皆感ぜぬもの  
 こそなかりけれ。

そして、この玉は興福寺の金堂の釈迦文仏の、大職冠のお造らせになった御本尊の眉間にはめこみましたので、今日まで伝わっております。  
 かの海女の最期の様子、また大臣親子の様子は、人の世のものあわれの極みであると人々は皆心から感激したということです。

## 大職冠 第五段

① 天皇。

② 宮中。

③ 「ういこうぶり」の転。成年に達したとして、男子が元服して初めて冠を着ける儀式。

④ 左大臣の次の位。

⑤ することもなく、なんとなく物思いにふけること。

⑥ 保育の役目の男。もりやく。

⑦ 近衛府（＝天皇の警固を役目とする役所）の次官。

⑧ 位とそれに応じた職務。

⑨ 疑問に思うこと。  
⑩ おそれおおいこと。  
⑪ 香川県讃岐市の地名。

かくてそののち、若君は都にのぼらせたまいつつ年月重なり、今ははや十四歳になりたまひ、君の恵みの深きゆえ、去年の春殿上にてういかぶりめさせたまひ、右大臣房前公と申したてまつる。

あるつれづれのことなるに、御めのとの少将有澄をめされ、「さてもわれ淡海公の子と生まれ、官位・職録ともにして何に不足はなけれども、心にかかることとは、この身残つて母知らず。如何なることぞ」とおおせける。

少将うけたまわり、

「ご不審はもつともなり。かたじけなくも御母は讃洲志度の浦房崎の……。あまり申せば恐れあり」

と、言葉を残して語り得ず。

若君このよし聞きしめし、

その後、若君は都にのぼり、年月も過ぎて十四歳になりました。帝に大切にされ、去年の春殿上で初冠の儀式があり、以後、右大臣房前公と名乗るようになりました。

ある日のこと、乳母の少将有澄を呼び、「わたしは淡海公の子と生まれ、官職に不足を思うことはないが、母というものを知らない。なぜなのか」と尋ねました。

「不審に思うのはもつともです。あなた様の母上は讃洲志度の浦房崎の方、しかし、これ以上申し上げるのははばかられます」と、それ以上は語ってくれません。若君は

①身分のいやしい女。  
②もしそうだとしても。

③ほうきのようになった木。「母」にかけて言

④う語。  
⑤仏教で、世界の中心にそびえ立つ高い山。

⑥（批判がましいことを）あれこれと。

⑦召使いたち。

⑧さしず。また、通達。

⑨多く。

⑩めしつれて。

⑪そのあいだは。

⑫自分。

⑬病気だと言って。

「さてはいやしき海女の子、しづの女の腹に宿りけるぞや。よ

しそれとてもははきぎのしばし宿るも月の光、雨露の恩にてあ

らずや。父大臣の養育は須弥山よりもなお高し。また母の胎内

に十月苦しむ産育のご恩のほど、滄海かえって浅しとす。い

れかおろかにぞんずべき。せめては、かのところにたずね下

み墓所へもうでつつ、御菩提をとぶらわんと思うはいかに」

とおおせける。少将うけたまわり、

「こは御孝行の御心、とこう申し述べがたし。さあらば下下

申しつけ、お供の用意をいたさん」

と、すでに御前を立たんとすれば、若君、

「しばし」

と止めたまい、

「このこと広くきたあらば、帝へ聞こえ、せんもなし。人あま

たにてかなうまじ。なんじ一人めし具し、さて帝の御方へは、

そのほどはそれがし所労と号しつつ、しのびて下り申すべし。

その用意つかまつれ」

「かしこまりてそうろう」

「さてはいやしき海女の子なのであろう。いやしい女の腹に生まれたのだな。そうであつ

たとしても、母は母、その恩に変わりはない

はず。父大臣の養育の恩は須弥山より高く、

母の胎内に十月いた恩もまた、海より深いと

いわねばならぬ。いずれも大切にせねばなら

ぬものだから、せめて、その地に行き、墓に

もうでて菩提をとむらいたいと思うが、どう

じゃ」

少将は、

「まことに孝行なことでございます。では、

下々のものに言いつけ、旅の用意をさせまし

よう」

と、行こうとするのを、

「待て待て」

と止め、

「このことが帝の耳に入つても具合が悪かろ

う。たくさんの人を連れて行くわけにも行く

まい。そなた一人を連れて行くことにし、帝

には、病気と云うことにして暇をいただき、

お忍びで行くことにしよう。そのつもりで、

- ①母。たらちね。
- ②『詞花和歌集』の「いにしへの奈良の都の八重桜今日九重にのいぬるかみ(伊勢大輔)」を踏まえる。以下、道行文。歌枕などの地名に他のことばをかけた表現を連ねている。
- ③しんみりと。藤原家を祖とする。
- ④藤原北家。藤原房前を祖とする。
- ⑤衣の袖のわきを縫うらしい。
- ⑥言うに言えないうすばらしい。
- ⑦奈良東部にある山。春日神社の神域となつて
- ⑧いる。歌枕。
- ⑨奈良東部斑鳩(いかるが)町の一部。大和国から河内国への重要な交通路。
- ⑩あざやかな色。
- ⑪奈良東部斑鳩(いかるが)町の一部。大和国から河内国への重要な交通路。
- ⑫まだ夜が深いときに。
- ⑬河内国河内郡と大和国平群郡の間にある峠。
- ⑭奈良街道の生駒山を越える交通の要所。
- ⑮餅を採す。
- ⑯たぐさんの種類の小鳥たち。
- ⑰いろいろな声のようす。
- ⑱優美である。
- ⑲心の底から。
- ⑳大阪府東大和市の東部地域。生駒山地の西側一帯。くらがり峠を大阪側につたあたり。
- ㉑牧岡神社(元春日社と称される)がある。
- ㉒牧岡神社のあるところ。「玉垣」は、神域を示すために神社のまわりめぐらした垣根。
- ㉓『古今集』の「君をおきてあだしごころをわがもたば末の松山波も越えなん、また『後拾遺集』の「ちぎりきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波越さじ」とは」をふまえる。
- ㉔道ばたにはえてる芝。
- ㉕幼い。
- ㉖自分で飼っている。
- ㉗京都府宇治市の北部。奈良街道の道筋にある。また、藤原氏の埋葬地。『万葉集』に「山科の小幡の山を馬はあれと徒歩(かち)より吾が来し汝(な)を思いかねて」と詠まれて以来、「駒」を連想する。
- ㉘「君を思い」と「思いのかずかず」をかける。未詳。「仲」とかける。
- ㉙これこそあの有名な。
- ㉚なにわえ。大阪湾。とくに淀川の河口付近。
- ㉛(あし)の生えた湿地帯。母に捨てられた藤若の身の上を連想させる。
- ㉜乗る人もなく、うち捨てられた舟。母に捨てられた藤若の身の上を連想させる。
- ㉝『新古今和歌集』の「難波濁短きあしの節の間もあわでこの世をすくしてよとや(伊勢)」を踏まえる。ほんのちいさいときに別れた母。

と、主従二人御所を出で、しのびて讃岐へ下らるる。

さてそののちに藤若丸、死してわかれたらちめの菩提を深く訪わんため、めのとの少将めし具して、奈良の都の八重桜、今日たち出ずる旅衣、うら珍しき笠の緒を、いとしめやかに結ぶ手のたもとゆたかに出でたもう、心の内こそやさしけれ。北の藤波栄えんと思ふ心も頼もしく、花の色香に若草の雪間をわけて生い出ずる。うぐいす袖のえならぬに、心ときめく春の空、三笠の山のうすがすみ、竜田の森にさく梅もただ紅色に愛でたまい、花か錦か紅のにおいも深き古川を渡りくらべて今ぞ知る旅のうき身の道すがら、心の暗の夜をこめて、くらがり峠過ぎ行けば、こずえにあさる百千鳥、おのがさまま声あやは、げにしおらしきながめぞと、うらなく語りなぐさみて、なお行く先は牧岡の宮居静かに伏しおがみ、赤の玉垣おのづから千歳の数の松が枝も君にひかれて末永く、浪は越すとも西の海、遠きながめの道しばに、まだいわけなき里の子が手がいの駒を放ちてん小幡の里にあらねども、君を思いのかずかずにしのびあう夜の中村の里過ぎ行けばこれやこの難波入江の捨小舟。短き

主従二人御所を出て、お忍びで讃岐へ下っていったのです。

藤若丸は死にわかれた母の菩提をとむらうため、めのとの少将をつれて、八重桜のころ、奈良の都を出たのでした。旅衣に身をつつみ、笠の緒を結んで出発しましたが、その心の内はけなげなものでした。藤原北家が栄えるようにと思ふ心も頼もしく、若草が雪間をかきわけて生い出るようです。なんともいえないうぐいす袖の着物を着て、うぐいすが鳴いて心ときめく春の空、三笠の山のうすがすみ、たつや、立田の森にさく紅色一色の梅をながめ、花か錦かと思ひながら古川を渡ってわかる旅のつらさ。その道々を、一途な思いを胸にだき、まだあけやらぬくらがり峠を過ぎ行けば、たぐさんの小鳥たちがえさをさがしてこずえに集まって鳴いている。そのいろいろな声は、本当にすばらしいと、心から思い、旅のつらさもわすれ、なお行く先は平岡の宮でした。そこを静かに伏しおがみ、赤色の玉垣に沿って生える松の枝に末永くと祈りました。「浪は越すとも」とうたわれた西の海はまだ遠く、遠くに見えるながめは、道しばにまだ幼い里の子が自分の飼っている駒を放つたという小幡の里、君を思って何度もしのびあう夜があったという中村の里などを過ぎ行く「これやこの」の句で有名な浪速入江には捨小舟が見える。

- ①海面。「うみ(＝いっぱいになる)」をかける。  
 ②乗ることができて。「法(のり)」をかけ、あとの「私の縁」「めぐみ」など、仏教に関する語を引き出す語となっている。  
 ③大阪市中央区淀川南岸。  
 ④大阪市住吉区長居。  
 ⑤夜中に鳴く小鳥たち。  
 ⑥淡路島北端の東側、海に臨んだ小さな岩島のことだという。「千載集」の「小夜千鳥ふけの浦におとすれて絵島が磯に月かたぶきぬ(家基)」を踏まえるか。  
 ⑦鼓の緒から連想した表現。  
 ⑧『古事記』『日本書紀』で、いざなぎの命・いざなみの命が「天のさかほこ」を使って最初につくった鳥が淡路島であるとす。  
 ⑨春の日。  
 ⑩徳島県鳴門市と淡路島の間海峡。「風が」鳴る一にかける。  
 ⑪香川県大川郡志度町の海岸。前出。  
 ⑫菅や茅でつくった菰(こも)でおおって作ったそまつな小屋。

- ⑬海藻の一種。  
 ⑭謡曲『海士』に見える言葉。以下、謡曲『海士』に見える言葉も多く取り入れている。「古今集」に「海女の刈る藻に棲む虫のわれからと音(ね)をこそ泣かめ世をば恨みじ(典侍藤原直子朝臣)」とある。  
 ⑮海女のかるも「海女の刈り取る海藻。わが身ゆえに。海藻に棲む「われから」という虫とかける。

⑯あなた。

⑰海中にもぐって漁をすること。

あしの節の間も、会わで別れし人ゆえに、袖は涙にうみづらや。  
 渡海の船に乗りを得て、大江の岸、長居の浜の小夜千鳥、え  
 にも絵島の岩が根に波のつづみの音高く、しめつゆるめつおも  
 しろや、ゆるめつしめつおもしろや。水の淡路の島影や、天の  
 さかほこ長き日のめぐみも深き沖つ風。遠く鳴門の夕波にゆら  
 れてゆられて今ははや志度の浦にぞ着きたもう。

ようようその日も暮れぬれば、いかなる海女の苔屋にも宿借  
 らばやと思しめし、しばしたたずみたまいければ、霞む夕べの  
 遠山に月差し出するそのかげのみぎわの波にうつる景色、げに  
 もえならぬ風景と、ながめ入りてぞおわします。

かかるところに、はたちあまりの女房、手にはみるめをかり  
 持ちて、海女のかるもに住む虫にあらねども、われからぬらす  
 たもとかな。世渡るわざのことなれば、心うしとも思わじと  
 家路を差してぞ帰らるる。ときに少将待ちうけ、

「おことはこの浦の海女にてあるか」

「さんそうろう。この浦のかずきの海女にてそうろう」

少将聞きて、

自分も捨小舟同様で、浪速入江は「短きあしの節の間も、会わで」と歌うたわれたが、うまれてすぐに別れた母のことを思うと、袖はすっかり涙にぬれるのでした。私の加護のおかげで船に乗ることができ、大江の岸、小夜千鳥の群れる中井の浜の、江島の岩をうつ波の音は高く、その音は鼓のようでおもしろいことでした。淡路島は天のさかほこで有名ですが、その島影を見ながら行くと、天の神のおかげで、春の長い日、沖つ風を帆にうけて、遠く鳴門の夕波にゆれゆれて今ははや志度の浦にお着きになりました。

やがてその日も暮れようとするとき、どこか海女の庵にでも宿を借ろうと思ひ、しばらくあたりを見回していますと霞む夕べの遠山に月が出てきて、みぎわの波にうつっている光景はえもいわれぬ美しい光景でした。

そこへ二十歳くらいの女房が、手にみるめを持ち、たもとを濡らしながら、家へ帰るのに出会いました。  
 「そなたはこの浦の海女か」  
 と少将が聞きますと、  
 「はい、この浦で海底にもぐっている海女でございます」  
 と答えました。

「かずきの海女ならば、あの水底のみるめをかりてまいらせせうらえ」

海女人うけたまわり、

「不思議やな、目なれぬ貴人の、みるめをめされんとは。かるまでもなし、このみるめをまいらせんと申す。」

少将聞きたまい、

「いやいや、みるめをめさんとはあらず。あの水底の月をご覧ずるに、みるめしげりてさわりとなれば、かりのけよのご錠なり」

海女人うけたまわり、

「ああ、さては月見ん御ためや。いにしえ、明珠をこの沖にて竜宮に取られしをかずきあげしもこの浦の海女人なり。いざいざわれもみるめをかりてまいらせん」

若君聞しめし、

「何と、明珠をかずきあげしもこの浦の海女にてあると申すか」「さんそうろう。海女とていやしめたもうなよ。その海女人の

「海女ならば、あの海底のみるめを刈ってくれ」

「不思議なことをおっしゃいます。刈らずとも、この手にあるみるめをさしあげますが」

「いや、みるめを食べようというのではない。水にうつる月をみたいのじゃが、みるめが邪魔になるので刈ってほしいのじゃ」

「ああ、月を見たいためですか。その昔、龍宮に取られた珠をこの沖でもぐって拾い上げたのもこの浦の海女なのです。では私もみるめを刈ってきましょう」

「なに、珠をもぐって拾い上げたのがこの浦の海女だというのか」

「そうでございます。ですから、海女といっても見下げてはなりません。」

①原文は「あななその月」。謡曲「海士」で「水底」とあるのによる。

②じゃま。  
③貴人の命令。おおせ。

④面向不背の玉。

⑤もぐって海底から取ってきた。

胎内に宿らせたもう御子こそ、当時都に栄えたまう房前の大臣にてましますぞや」

若君聞しめし、

「やあ、われこそは房前よ。あらなつかしの海女人や。御母上の御ゆくえ、知ることあらば語れや」と、涙にむせばせたまいける。

海女人うけたまわり、

「さては、今まではよそのこととこそ思いしに、御身の上にておわすかや。げに心なきあまごろも、さらでもぬらすわが袖を重ねてしほるばかりなり。唐の高宗の御使いに、万戸將軍といしもの、明珠をこの沖にて竜女に取られ申せしこと、日本の名折りとて、御身の御父淡海公、御心をくだかせたまい、このところに下りたまい、三年わび住みなされたる、旅寝の床のかねごとに、御身をもうけたもうなり。かかる貴人のいやしき海女の胎内に宿らせたまうも一世ならぬ奇縁ぞや。たとえば日月のにわたずみにうつり、光をますにことならず。御身を世に立てまいらせんため、母は命をかるんじて、竜宮城にわけ入

①不名誉。

②約束をかわすこと。

③前世からの因縁。  
④「にわたずみ」は雨が降って地上にたまり流れる水。「日月」は淡海公、「にわたずみ」はその母の海女をたとえる。

その海女の胎内に宿った子こそ、いま都に栄えている房前の大臣なのでございますから」「いや、私が、その房前である。あら、なつかしい海女であることよ。母上のことなど、知っていることはなんでも語ってくれ」と、若君は涙にむせびながら頼みました。海女は、

「今までは、他人事だと思つて聞いてきましたが、あなた様がお子でいらつしやいましたか。それを聞くと、ほんとうに悲しくなりますが……」

唐の高宗の使いの万戸將軍という方が宝の珠をこの沖で龍女に奪われたのですが、日本にとつても不名誉であるとお父上の淡海公は心を痛め、この地に下り、三年間お住まいになつてこの地の海女との間にあなたをもうけたのでございます。そんな高貴な方と夫婦になつたのは前世からの因縁なのでしよう。そして、あなた様を世に出すために母上はその命を犠牲にして龍宮城に行き、

①藤原氏の家督をつく者。

②供養追善のために墓に立てる、頂部を塔の形にして梵字や戒名などを記した板。

③古い、土をつきかためて作った墓。

④すたれず。

⑤そうでないなら。  
⑥もと、京都の火葬場のあったところの地名。  
⑦ここでは墓場の意。  
⑧「亡霊が」とりついて殺す。

りて、玉をうばいかえれども、悪竜に追っかけられ玉をかくさ  
んようもなくて、わが乳の下をかき切りて玉をおしこめ空しく  
なり、御身をよつぎにそなえしなり。今は何をかつつむべき。  
これこそ御身の母海女人の幽霊」  
と、消すがごとくにうせたもう。海女人と見えつるは古きそと  
ばとなりける。

若君驚きたまいつつ、

「のう母上にてましますか。これが母ごの古墳かや。親子のち  
ぎり浅潮のみぎわに残る古つかを今見ることの悲しや」  
と、墓印に抱きつき、もだえこがれてなげかるる。

ようよう涙をおさえつつ、

「のういかに母上様、親子のちぎりくちせずし、かりの姿をま  
みえたまわば、などはじめより母ぞとは名のりたまわずして、  
風の前なるともし火の消えなるときにそれぞとは、名のらせた  
もううらめしきよ。せめて甲斐なき御姿、今一度まみえたま  
い、わが心をなぐさめたまえ。さらずは同じあだし野の露もろ  
ともにとり殺し、来世で対面させてたべ。あい見ぬ先の恋いし

玉を奪って帰ってきたのですが、悪龍に追  
かけられ、玉をかくすために自分の乳の下を  
切つて、そこに玉をおしこめ、そのまま亡く  
なられたのです。その後、あなたは淡海公の  
世継ぎとなって都にのぼったのです。いまは  
何もかくすことはありませんね。この私は、  
あなたの母、海女の霊ですよ」  
と言うとあつというまもなく消すように  
消えてしまいました。海女と見えていたのは、  
古い卒塔婆でした。

若君は驚き、

「ああ、母上でありましたか。これが母上の  
お墓ですか。親子のちぎりが浅かったため、  
こうして古い墓を見ることができないのは、  
なんと悲しいことでしょう」  
と墓に抱きついて、もだえ嘆くのでありまし  
た。やがて涙をおさえ、  
「母上様、親子のちぎりを思って、この世に  
姿をあらわしてくださいのなら、どうして、  
最初から母と名乗ってくださいならなかったの  
でしょう。せめてもう一度、その姿を私の前に  
あらわしてくださいませんかでしょうか。さも  
なければ、私を殺し、あの世で対面させてく  
ださい。

①何にもならない。

さを、今の思いにくらぶれば、昔の思いは何ならず。もしこのままにてわかれては、長長命はあるまじきぞ。都へとても帰るまじ。このこけ露を枕にし、こがれ死に申すべし。のう母上、母上」

②もつともなことで、非常にかわいそうである。常套文句

と、古きそとばをおし動かし、もだえこがれてなげかるる、こ  
とわりせめてぞあわれなる。

若君の志、ふたたび冥途に通じけん。いたわしや、母幽霊、  
雲かけぶりのごとくにて、つかの内より出でたまひ、

③不安に思うこと。

「あら勿体なや、藤若殿。世にあらせんと思ふゆえ、母が命を  
捨てたりしを、おろそかに思すゆえ『都へ帰るまじき』とは  
のたもうかや。うらめしや、この筆のあとをこ覧じて不審をな  
さでとぶらいたまえ。あらなつかしのわが子や」

と、のたもう声の下よりも、霧やかすみと立ちのぼり、姿は  
消えて失せにけり。

若君このよし聞こしめし、

「さては亡母の手跡か」

と開きて見れば、

もしこのままわかれてしまつては、とても生きてはいられません。都へも帰りません。ここでこがれ死んでしまおうと思ひます。おねがいで、母上」

と、古い卒塔婆を押し動かして泣いている様は、まことにあわれでありました。

若君の志が冥途にも通じたのでしようか、母の霊が雲かけむりのように墓のなかからあらわれて言ひます。

「なんということを言うのですか、藤若殿。そなたを世に出すためにこの母は命を捨てたのですよ。それをなんとも思わないから『都には帰らない』などと言うのですか、なんとうらめしいこと、この手紙をよくこ覧になつて、私の供養をしてください。さようなら、かわいい子」  
と、また霧か霞のように消えてしまいました。

若君はその手紙を手に取り、  
「さては母の手跡か」  
と開いて見ますと、

①黄泉。よみのくに。  
②何年もたつ。

③冥土に向かう道。また、冥土。  
④ほんやりとしているさま。  
⑤冥土のまよい。

⑥手紙に「十三年」とあったが、母が亡くなつて「十三年」であることと一致する。

⑦香川県大川郡志度町にある真言宗の寺。藤原房前創建、行基開山と伝えられる。  
⑧奈良時代の僧。大仏造営の勸進（寄付をつめること）に起用されたことで有名。  
⑨仏道を説いて悟りに導く僧。

⑩信心が仏に通じること。

⑪魚や貝をとること。  
⑫「贓罪」か「贓罪」は、不正な手段で財を得た罪を言うが、普通賄賂をとることをさす。ここでは魚貝の命を奪う漁を行なうことをさして言う。

「魂黄壤に去つて一十三年、かばねを白沙にうずんで、日月の算のぶ。冥路昏昏たり。われをとぶらう人なし。君孝行たらばわが冥闇を助けよ」  
と書きたもう。

「げにそれよりは十三年。ああ、さては疑うところなし。菩提をとぶらいまいらせん。少将いかに」

とおおせける。

有澄うけたまわり、

「もつともなるおおせかな。幸い当所志度寺に行基菩薩ましませば、この御僧を導師と頼み、御とぶらいそうらえ」  
と申し上げる。

若君大きに喜びたまひ、すぐにお寺にまいらるる。寺にもなれば行基菩薩に対面あり、一一次第に語りたもう。行基聞こしめし、

「君孝行の御心、諸仏も感応ましますゆえ、かかる不思議のあらわれたり。ずいふんとぶらいまいらせん。さりながら海女人と申すは狩りすなどりを業として、一生ぞうざいの悪人なり。」

「死んでから一十三年、死体は白沙にうもれたまま、長い年月が過ぎた。魂は天にのぼることができず、暗いみちをさまよつておりませす。そんな私を供養してくれる人はありません。あなたが孝行人ならば供養をして暗い道をさまよう私を助けてください」  
と書いてあります。

「たしかに、母の死からいまは十三年。ああ、ではたしかに母の霊であったのだ。では、この言葉どおり母の菩提を弔うことにいたそう」

と仰いました。それを聞いて有澄は、  
「もつともでございませす。幸いこの地の志度寺には行基菩薩がいらつしゃいます。この方を導師にお願いして弔いをいたしましよ」と申し上げました。若君は大いに喜び、すぐにお寺にまいりました。行基菩薩と対面し、くわしく事情を語つたところ、行基も感心して仰いました。

「あなた様の孝行のお気持ちに、諸仏も感心され、そのような不思議も起こつたのでございませす。私が供養してさしあげませす。しかし、海女というものは、狩りや漁など殺生をなりわいとするものでありますから、

①いかげん。  
②成仏しにくい。  
③身分などに関係なく、来集したすべての人々に全く平等に財と法を施す法会。  
④ガンジス川。  
⑤魚。  
⑥天竜・夜叉・阿修羅など、仏法を守護する八種の異類。『法華経』提婆達多品に見える。  
⑦人間と人間以下の者。  
⑧草木石のような無生物にいたるまですべてが成仏すること。

⑨まわりすべてによく知られ。  
⑩竜族の王。面向不背の玉を奪った。  
⑪竜宮にいたるといふ仙女。

⑫しわざ。

⑬日本で、仏のいる方向とされる。

⑭お花とお香。

⑮前に。

⑯何とも言えないほどすぐれていること。

①おぼろげにては浮かびがたし。房崎の浜にして無遮の大会を行  
い、恒河のうろくず、天龍八部、人与非人にいたるまで、草木  
国土悉皆成仏の法事をなしてとぶらわん」

と、み弟子達におおせつけ、すでに用意と聞こえるに、この  
こと四方にかくれなく、竜王伝え聞きたまい、二人の竜女を  
めし集め、

「いかになんじらうけたまわれ。そもこの海女人と申すは、わ  
れわれが所業にて御命を亡ぼせしに、行基菩薩の導師にて草木  
国土悉皆成仏の大法会を行いたまえば、われわれごときのもの  
までも成仏まさに疑いなし。いざわれわれも法事の役をつとめ  
ん」

とおのおの用意と聞こえける。

すでにその日になりしかば、房崎の沖に仮屋を建て、西向き  
に本尊を安置し、香華をそなたてまつり、導師衆僧もろとも  
にまみえ出させたまいつつ、そとばを書きて水に浮かべ、とぶ  
らいたもうぞありがたき。

不思議や日ごろはありとも思わぬ水の面に微妙の宮殿浮かみ

いかげんな供養では成仏できません。房崎  
の浜で無遮の大会を行い、恒河のうろくずか  
ら、天龍さらには人間と人間以下の者たちに  
いたるまでを集め、草木国土悉皆成仏の法事  
をして弔うことにいたしましたしう」  
と、弟子達に命じました。

その用意がととのった頃、この法事のこと  
は龍王の耳にも入ってきました。そこで、二  
人の龍女を呼び寄せ、

「よく聞け。この海女というのは、われわれ  
のために命を失ったものだが、行基菩薩を導  
師として草木国土悉皆成仏の大法会を行うと  
いうことだから、それに結縁すれば我々も成  
仏は疑いはずじや。さあ、いっしょに法  
事の役を勤めようではないか」

とそれぞれに準備したのでした。  
法会の当日、房崎の沖に仮屋を建て、西向  
きに本尊を安置し、香華を供え、導師や僧た  
ちが現れ出てきました。そして、卒塔婆を書  
いて水に浮かべ、弔ったのです。まことにあ  
りがたいことでした。

①さては。  
②見ようとすること。

③功德の力。  
④「五逆」は仏教で、五種の罪悪。父・母・阿羅漢を殺すこと、僧団の和合をこわすこと、仏の身体を傷つけること。これを犯せば無間地獄（絶え間なく剣樹・刀山・鑊湯などの苦しみを受ける、地獄）におちるといふ。このような罪をおかした釈迦の従弟の提婆（だいは）達多も、かつて釈迦に法華経を語った功德により、天王如来（達多の成仏するときの名）となる「記別」（「釈迦の仏弟子についでの子言」を得たといふ）。

⑤「法華経」提婆達多品に見える故事。娑竭羅（しゃかつら）竜王のむすめは八才でよく仏道をおさめ、仏前に宝珠を供えたが、そのときたちまち男子に変成し、南方無垢世界に生まれたといふ。

⑥生死の苦しみを解脱（げだつ）（逃れて絶対自由の身になること）して涅槃（ねはん）（煩惱を断ち切った、静かで安らかな境地）にいたること。

⑦仏教で、仏道行者の臨終のとき、仏がこのようにして来迎するといふ。

⑧皆遙かにかの亡母が成仏するのを見た。

出で、導師二人現れたり。人人このよし見るよりも、

「すわや、竜神感応し、法会を見つき申すか」

と各各感じいたりける。

かかるところに竜王波間に現れ出で、

「あらありがたの御経やな。われらが身までも頼もしや」と、喜ぶことは限りなし。

と、喜ぶことは限りなし。

時に行基、竜王に向かい、

「この御経の功力には、五逆の達多は、天王如来の記別をこう

ぶり、八才の竜女は南方無垢世界に成道をとなう。今この大会

の徳用にて、天龍八部、人与非人、成仏得脱疑いなし」

と、のたもう声の下よりも、西方に紫雲たなびき、音楽聞こえ、

宝塔来迎ありけるは不思議なりける次第なり。

ようよう間近くなりしかば、たちまち宝塔宮殿の上に留まり

ける。ときに行基手を合わせ礼したまえば、水の上の宮殿に「皆遙

見彼亡母成仏」といふ文字ありありと浮かみしは、不思議とい

うもあまりあり。

そのとき、くだんの塔が二つに割れ、海女人の姿浮かみ出

と、不思議なことに、日ごろ目に見えない龍宮の宮殿が水面に浮かび出てきて、導師二人が現われました。人々はこの様子を見て、「龍神がこの法会に感応してあらわれたのだ」と感心しながら見ていました。

やがて、龍王が波間に現れ出て、

「ありがたい経であります。我々までも成仏することができそうです」と喜んでいきます。

行基は龍王に向かい、

「この経の功力により、五逆の達多は、天王如来に結縁し、八才の竜女は南方無垢世界に成仏できました。この大会の徳により、天龍八部も人も人でない者もすべて成仏し解脱することができました」といふ声とともに、西の方から紫の雲がたなびいてきて、妙なる音楽が聞こえ、宝塔が天から降りてきました。まことに不思議なこと

であります。

そして、間近くなりますと、宝塔が宮殿の上に留まりました。行基が手を合わせ礼をいたしますと、水の上の宮殿に「皆遙見彼亡母成仏」といふ文字がはつきりと浮かびあがりました。そして、あの墓は二つに割れ、海女の姿があらわれ、その宝塔に乗っていたので

①如意宝珠と輪宝を持つて一切衆生のねがいを聞き届け、ときには姿を変え、衆生を救うという。多くは六臂の像。  
②迷いの世界にいる人々に仏法を説いて悟りを開かせ、涅槃の世界に渡らせること。  
③衆生済度のために仮りにとる方法。

④法華経八巻を朝夕、四日間の八座で読誦・供養する法会。

で、かの宝塔に乗りたもうはありがたかりける次第なり。

ときに導師、この宝塔を差し上ぐれば、虚空はるかに上りたまい、

「まことは、われは如意輪観世音。衆生済度の方便に、かりに海女人と現ぜしなり。藤原氏の末長くいよいよ守らん。さらば」と、のたもう御声の内よりも観世音と現れたもう。

さてこそ讚洲志度寺にて、毎年八講、朝暮の勤行、仏法繁昌の霊地となるも、この供養とうけたまわる。ありがたしともなかなか申すばかりはなかりける。

終

なんとありがたいことではありませんか。導師が、この宝塔を差し上げますと空の彼方に昇っていき、

「まことをいうと、私は如意輪観世音である。衆生済度のために、かりに海女の姿になってあらわれたもの。藤原氏の将来も末長く守っていく。さらばである」

という声とともに観世音の姿になったのでした。

以後、讚洲志度寺では、毎年、八講朝暮の勤行を行ない、仏法繁昌の霊地となり、この海女の供養をしてきたのです。

なんともありがたいかぎりでございます。

尾口のでくまわし教材作成委員会

木越 治（金沢大学歴史言語文化学系教授）

道下 甚一（東二口区文弥人形浄瑠璃保存会会長）

中内 幹雄（深瀬のでくまわし保存会事務局長）

村上和生雄（白山市教育委員会歴史遺産調査課主査）

協力者

土谷 梓（金沢高等工業専門学校教諭）

金 永昊（金沢大学大学院人間社会環境研究科博士後期課程）

木越 秀子（金沢大学大学院人間社会環境研究科博士後期課程）

丸井 貴史（金沢大学大学院人間社会環境研究科博士前期課程）

工藤 志昇（金沢大学文学部）

国指定重要無形民俗文化財 尾口のでくまわし

## 大 職 冠

平成二十一年三月発行

編集 尾口のでくまわし教材作成委員会

発行 加賀の民俗文化財活用委員会

委員長 喜田 紘雄

石川県白山市殿町三十九

白山市教育委員会事務局歴史遺産調査課内

TEL〇七六―二七四―九五八六

印刷 能登印刷株式会社 金沢市武蔵町七番十号